
アイス

魔桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイス

【Nコード】

N4147Z

【作者名】

魔桜

【あらすじ】

雛原詩織は同じ家に住んでいる、黒葛陸に密かな恋心を抱いていた。本心では今すぐにでも告白したい。だが、親友である瀬川麻美にも相談できない、重大な秘密が詩織にはあった。

未成熟な高校生が、それぞれの葛藤と思惑を胸に傷つき、慟哭し、成長していく、恋愛長編小説。

離原詩織視点（１）（前書き）

少々、官能的な表現があり、また全体的に暗い内容となっているので、それらが苦手な方は読まないほうが無難です。

離原詩織視点（1）

1

木製のドアの前で私は立ち尽くす。

意を決してノックしようとするが、何故か見えない壁に阻まれる。もう一度挑戦する前にゆっくりと木目を指でなぞる。この通り、ちゃんとドアに触れることはできる。できるのだが、どうしても部屋の中の人物を起こすことができない。

制服のスカートをぎゅっと両手で掴む。

どうしよう。せっかく早起きできたというのに、これじゃあまた昨日と同じように遅刻ギリギリの時間になってしまう。

そんなことになったらまた先生に怒られる。ただでさえあの担任教師は怒りやすいので有名なのに。

夏は終わったというのに、手から嫌な汗がじわりで出てくる。

どれだけ時間が経とうが、慣れないものはしょうがない。彼を起こそうとするとどうしても緊張してしまう。

いつもならば私の役目じゃないからやらないで済むのだが、昨日や今日みたいにたまにやらなければならない時がある。

彼と話すのが不愉快というわけではないのだが、相手が相手なのでどうしてもノックを躊躇ってしまっているのだろうか。

こうして彼のことを意識していると、途端に動悸が激しくなる。

あまりにプレッシャーがかかりすぎて過呼吸になりそうになる。落ち着く為に深い深呼吸を数回やる。

よし、と握りこぶしで奮起し、再度挑戦しようとするがやはり駄目だった。

眼前のドアと私の右手はS極とS極の磁石のように接することができない。

——このままではおそろく一生。

まったく、どうしてこんなに私が焦らないといけないんだろう。八つ当たりだというのは百も承知だがこれだけ私が失敗を重ねてしまうと、彼が自発的に起床してこないことが駄目だという発想になってしまう。

これだけやっても起こせないのなら、とにかく下に降りて朝食を食べないと。

私は溜め息を零しながら踵を返す。

すると、決してわざとでないが左手がドアにこつんと当たってしまふ。

予期せぬ事態に全身から汗がどつと出る。

部屋の中から気だるげな呻き声と何かモノが落ちる音が聞こえる。どうやら彼もようやく起きてくれたらしい。当初の目的を果たしたことになるのだが、私にも心の準備というものがある。

ただどこも不測の事態が降りかかってきてしまふと対処のしようがない。

逃げてしまおうか、それともあえて堂々と部屋に入ってしまった方がいいのかを逡巡する。どっちを選択するにしろ早く行動しなければまた遅刻してしまう。

焦りすぎて私が右往左往しているとドア越しに声を掛けられる。

「……今、何時？」

私の肩がびくりと跳ねる。

欠伸交じりだけれどもようやく彼も少しは覚醒したようだ。相も変わらずの不機嫌そうな声音だ。

それはいつものことなのであまり気にはならない、と強がってみるけど本当は凄く気にしてしまう。相手が私のことをどう思っているかを考えてしまふ。

私には一生分ることがないことを考えること事態、人生においては無駄以外の何物でもないことだとはい覚しているがどうしても考えてしまふ。

「八時五分前です。今日の朝食は母と一緒に作りました。できれば

冷めないうちに早く起きて食べてください」

母と一緒に、というのを協調する。

平日の朝飯は毎回母が作っているだけなのだが、特別に今日だけは朝飯を一緒に作った。

私だって休日ぐらいはたまに作ったりするが平日に作るのは初めてだ。

母は目をぱちくりしていたが、私が朝飯を作る意図を話すと妙に納得していた。

あの笑みには少し癪に障ったけれど、忙しい中手伝ってくれたのだけは感謝しないといけない。今度お礼にマッサージでもしてあげようかな。

「……うっ」

突然眠気が襲い、出そうになった欠伸を押し殺す。

私も彼同様そこまで朝に強いわけではないので、早起きする為にわざわざ携帯の目覚まし機能を使ったのだが、その効果はてき面だった。

私は三回目のアラームでなんとか起きることに成功できた。普段二度寝、三度寝を繰り返し、親に起こされるまで布団にへばりついて離れない私にしてはよくやったと誰かに褒めてもらいたいぐらいだ。

それにしても大音量で三回もアラームが鳴ったのに全く起きる気配がなかった彼の睡眠に対する執着心に驚嘆する。

「分かった。すぐにそっちに行く」

ドア越しになにやらがさごと音がする。多分制服に着替えている音だ。平日朝の食卓に出る時はいつも制服姿なのでそのくらいは予想できる。

私たちが通っている男子の制服は地味でありきたりな制服なので他校からはあまり人気はないのだが、女子の制服は人気が高い。

特に合い服が一番可愛いといわれていて、襟がしゅっと引き締まるように細くなっている白ブラウスの上からは、ベージュ色のベス

トを着用する。そしてスカートは赤と黒のチェック柄で可愛くて目立つ上下の組み合わせで、その制服が目当てで通う生徒もいる。

かくゆう私もその中の一人だ。私がこの高校を選んだ理由は自分の家から一番近い高校だったということもある。

だけど今自分の着ている制服に憧れを持っていたからという理由も小さくはない。

「何？ 他にも何か用？」

ドアの前に直立したままにいる私の気配に気づいたのか、ドア越しに苛立たしげな彼の声を投げ掛けられる。

「す、すいません！ すうッ……」

直ぐに下に降ります。と、言葉を続けられることは出来なかった。謝罪の直後に思いつきりドアに頭をぶつけてしまった。しかも思いのほか勢いがついていたので、少しばかり涙目だ。

意地で苦痛の悲鳴だけは上げなかったが、ほとほと自分のアホサ加減に嫌気が差す。

自分が失敗してしまうところを、いつもこうやって一番見られたくない人に見られてしまう。いや、今日はドアがあるので、失敗してしまった瞬間を見られずに済んだから、まだ良かったと思うべきだろうか。

「お前、何やってるんだ？」

心配というよりは呆れきっている声にさらに落ち込む。私はひりひりする額を抑える。

「な、何でもありません」

とにかくこれ以上彼に醜態を曝す前にここを離れたい。私は失敗を挽回しようとすればするほど、何かしら失敗してしまうか救いがない。

どうすれば私も麻美のようにしっかりと人間になれるんだろう。でもきつと私はあんな風に自分の指針をしっかりと定めて突き進むことは到底できっこない。

だったら今は自分のできることをやっていくことに専念しよう。

私は足早に階段を下りた。

離原詩織視点（1）（後書き）

現時点でダメなところがあればご指摘ください。

離原詩織視点(2)

ダイニングルームのテーブルに、ハムエッグに味噌汁、納豆と漬物といった一般家庭な朝の献立を並べる。素朴な料理の方が男の子はぐつとくるわよと、母に言われて私も作ったのだが、今さらながら母に一言物申したい。あの、全部あんたのことは分かっているわよっていう態度が気に入らないし、あの人の言い方はいちいち古臭いのもどうかなって思ってしまう。

まだ寝ぼけ眼な黒葛くんは椅子に座ると、そのまま薄型テレビの電源を入れる。家の中に朝のニュース番組の音が流れるが、正直ありがたかった。

もしも黒葛くんがテレビを観てくれなかったら、確実にこの場に沈黙がずっと続いていた。そんなたいたたまれない空間に居続けなければならぬことを考慮すれば、今の状況が最善だといってもいい。

それは頭では理解できている。それでも私は考えなくてもいい余計なことを考えてしまう。

黒葛くんは私とそんなに話したくないのかな、って。

「ご飯はどのくらいつましょうか？」

「普通」

私はい、と答えて、炊飯器から玄米と白米が一对一で混ざったご飯を私と黒葛くんの二人分よそぐ。

男が食べるご飯の普通量と女の普通量ではかなり相違があり、慣れるのに時間が掛かった。けど今では黒葛くんや、黒葛くんのおじさんがどのぐらいの量をつげばいいのかようやく丁度いい量を定めることができるようになった。

こうして彼と暮らすようになってそれほど時間は経っていないが、こうして少しずつ距離を詰めていければいいと思う。

「どつぞ」

「……ん」

黒葛くんは頬杖をつきながら片手でお碗を受け取る。視線はテレビに釘付けで、私を見ようとする気が全くないように感じられる。ここまで露骨に避けられると返って清々しい。私は彼と向かいの席に座わる。

そして手を合わせる。

「いただきます」

「……いただきます」

挨拶や最低限のことはこうやって喋ってくれるが、それ以外のことは一切不要で、私と話すこと自体が損だと考えているかのように黒葛くんは私と関わることに積極的ではない。それは今までの彼のアクションを思い返していけば分かりきったことだ。

黒葛くんが味噌汁に手をつけると眉を顰めた。

良かったと、私は内心安堵し、心の中でガッツポーズをとる。

あれは唯一私一人だけで作ったなめこ汁だ。母親に手解きを受けながら料理したのだが、これだけは私の自信作だった。だからこそ黒葛くんが気に入ってくれるか懸念していた。それがこつも露骨に反応してくれると作り甲斐があったというものだ。

黒葛くんが眉を顰めるのは、頬が緩む衝動を必死で抑えている証だということはこの前黒葛のおじさんに教えてもらった。それを聞くまで私は黒葛くんが眉を顰める度にビクビクしていた。だけど、この様子だと気に入って貰えたようだ。

その後、黒葛はこつちに全く視線を合わせないまま、ご飯とみそ汁を一杯ずつおかわりした。

私は喜んでよそぎながら普段は意識しない『早起きは三文の徳』という言葉进行い出だすと、思わず顔がにやけてしまう。

「親父と、雛原のおばさんはどうしたんだ？」

黒葛くんはハムエッグを咀嚼しながらちらりとこちらを一瞥する。「お母さんと黒葛のおじさんは朝早くから仕事に出かけました。もしかして何か用事でもあったんですか？」

「別になにもない」

それだけ言うとまた黒葛くんはまた無言を徹底して貫いた。

私はそれから必死で学校の話題や、テレビの星座占いのなど、黒葛くんと私が話せそうな話題を振ったのだが黒葛くんは全く食いつくことはなかった。

「ご馳走様」

黒葛くんは食べ終わった自分の皿を流し台に持っていき、水につけ始めた。

私は目を丸くした。

彼が珍しく皿洗いをすることに驚いたのではなく、自分は朝食の半分も手を付けていない時間で、彼が食べ終わっていることに驚いた。ほとんど私しか話していないとはいえ、いくなんでも早すぎる。急いで私が他のおかずに箸をつけていると黒葛くんは自分の分の皿をさつさと洗い終え、鞆を肩にかけていた。

「先に行く」

「ちょよ、ちょっと待つてください!」

私はまだ手づかずのおかずは放っておき、箸を置くと椅子から立ち上がる。

そして、台所に置いてあった包みを取り出す。

赤い包みの方が私の分で、青い包みの方が黒葛くんのだ。夏なら保冷剤などが必要となってくるだろうけれど、今の季節ならこのぐらいの包みで十分だ。

「あの、これお弁当です。迷惑かな?……とも思っただんですけど、クラスで黒葛くんを見るとお昼はいつも購買のパンばかりだったので、つい。やっぱりいつもパンばかりだと味気ないかなって思っただんですけど。あの、ちゃんと栄養も考えています。それで、あとですね、これ——」

「いい」

「はい?」

確かに彼の声で私の鼓膜は震えたはずだが、直ぐに頭に入ってこ

なかった。

朝食を作るだけならあそこまで早起きに固執しなくてもよかったはずだ。だけど私が携帯を使ってまで早起きした理由。それはただ、彼のために想って弁当を作ろうとしただけ。たったのそれだけのことだったけれども、私にとっては大切なことだったんだ。

それなのにいくらなんでもそんな素っ気ない言葉、一言で私の行為を無下に断るのは私に対してあまりに酷であるとはいえないのだろうか。

だけでもこの感情はお門違いだ。勝手にお弁当を作ってはしゃいでいたのは他ならぬ私なのだ。

「いない」

「そ、そうですね。すいません」

一分の隙もない、突き放したような黒葛くんの言い方に意気消沈する。やっぱり、いきなりお弁当とか気味が悪かったのかな。重かったのかな。

でも、私ってあんまり人に誇れるところがない。

そんな私が頑張れるのは料理だけだ。私が黒葛くんにできることはそれぐらいしか思いつかない。それが否定されたら私はこれから何をしていけばいいのかわからない。もう、私は何もするなつてことなのかな。

そんなの、嫌だ。

黒葛くんはご飯をおかわりするぐらい、私の料理を食べてくれたから口に合わないわけじゃない。だったら受け取ってくれてもいいと思う。それができないってこと、つまりそれは――

「あの……や、やっぱり、」

「いない」

私のことが嫌いだってことだ。

一度も振り向かないまま黒葛くんは家を出ていく。

これで、家には私一人きりだ。テレビを消してしまうとどうしようもなく空しくなるような沈黙がこの場を支配する。

分かっているつもりではいた。けれど私と黒葛くんと間を隔てている溝がこんなにも深いとは思わなかった。

どうやったって昔のように仲良しこよしというわけにはいかないみたいだ。どうしてこんなことになってしまったのか過去を振り返ってみると、それはそれで仕方のないことだと納得するしかない。

「はー、やっぱり駄目だったかあ」

独り言を聞く人間はいない。私は存分に独りごちる。

この家に来てからは少しでも距離を詰めようと自分なりに努力しているつもりだったのだが、中々実は結ばない。

「私達、幼馴染なものにな……」

子どもの頃は辛いこともたくさんあった。だけど、こうやって瞼を閉じて思い出すのは黒葛くんとの思い出だけだ。

だけど、久しぶりに会った君は、私の思い出の中の君と全然違っていた。

黒葛陸視点（１）

十

俺と詩織は家族ぐるみの付き合いだった。

お互いの親同士が大学時代の同級生だったらしく、久しぶりに会って意気投合したらしい。

結婚生活においての愚痴や子育ての大変さだけでなく、大学時代の思い出を語れる。そして、住んでいる場所が目と鼻の先だから気兼ねなくいつでも話せる。となれば親しくならない方がおかしい。

そんなぐあいでも両親が仲良ければ自然と子ども同士も仲良くなっていくのも必然で、俺達は物心ついた時からいつも一緒にいた。

小さい頃はそんな何気なくも幸せな日常がずっと続くと信じていた。誰だって子どもの頃はそうだ。成長すればするほど言葉にすれば恥ずかしい、『永遠』という儚く脆いものを真摯に受け止めて疑うことを知らない。

だけど、俺達の別れの日突然きてしまった。

詩織の父親の仕事の関係上、詩織はこの地に居続けることはできなくなってしまった。単身赴任するには父親の家事能力は壊滅的であつたらしく、どう足掻いても家族全員で引っ越さなければならなかったらしい。それだけ家族仲良いといってもいいだろう。

だけど俺の家の両親、特に母親は詩織の家族が遠くへ行ってしまうことに涙ぐむぐらい悲しがつていた。

それでも俺はそれ以上に辛かったと思う。

人前で泣きはしなかったが、枕に顔を押し付けて泣き叫んでいた。今考えるとあれだけ声が大きかったのだから部屋の外に声が漏れていたのかも知れない。それでも両親は俺に何も言ってこなかった。それは素直に感謝しなければいけないことだが、今さらになって感謝を示したとしてもそんな昔のこと両親は覚えていないだろう。

それに片方の親にはもう会うこともできない。だったらこの気持ち
は俺の胸にそっとしまっておくことにする。

あの時の俺はこのまま何もせずに別れるのだけは嫌だった。

もしも、このまま何もせずに離れ離れになってしまったら、それ
こそ俺達の関係は最後であるということ子どもながらに敏感に感
じ取っていたのかも知れない。

だから俺達二人は約束をした。

俺の記憶が確かなら言い出したのは詩織の方だった。

「ねえ、りつくん。私のこと好き？」

今は詩織から他人行儀でよそよしく黒葛くんと呼ばれているが、
当時は名前の陸からとったのか、あだ名でりつくんと呼ばれていた。
それに今頃になってりつくんと呼ばれたとしても恥ずかしくて返
事もまともにできないだろうから黒葛くんと呼ばれることには異存
はない。

「うん、好きだよ」

好きだという言葉をおくびにも出さないで言える年齢だった。好
意がある人間に率直に真意を告げるのは今の俺にとっては困難なこ
とになってしまった。

「じゃあさ、結婚式やろうよ」

「結婚式？」

結婚式という単語が幼かった詩織の口から出てくることは完全に
俺の思考の外にあった。

流石に俺はその時狼狽していた。

将来俺が誰かと結婚をするにしても遙か遠い未来のことだと高を括
っていた。それをまさかこんな小さい時に経験するなんて思っても
いなかった。

「そう！ 私とりつくん二人の結婚式」

反対の意思はなかった。

今思い出せば恥ずかしくて、身体中がこそばゆくなるような子ど
ものくだらないごっこ遊びだが、あの時の俺達は真剣そのものだっ

た。

擬似的な結婚式を挙げることができれば、俺達の心はいつまでも繋がっていられると微塵も疑っていなかった。二人が物理的にどんなに離れていても、上空を仰げば、青い空が世界中どこにだって繋がっているように、きつと。

だけどそれは子どもの特権であり、くだらないもの。だけど、だからこそうして思い出してみると輝かしいものだ。

黒葛陸視点（2）

結婚式会場は近所の公園でひと気のない時を狙った。

あの時は確か夏の頃だったと思う。

蝉を捕まえては詩織に見せていつて、その都度怖がって逃げる詩織の後姿を追いかけるのが楽しかった。

バッタが跳ぶ姿を見て興奮して作業そっちのけになってしまいそうになったのだが詩織に睨まれて捕獲するのを断念したりもした。

虫の誘惑を断ち切り、俺はそこら中に大量に生えてあるシロツメクサで簡単な花飾りを制作し、詩織の頭にかけてやった。

結婚式に花嫁が頭にのせる髪飾りの代用品としては少し心許ないかもしれないが、あいつは非常に喜んでくれた。

「ねえねえ、今の私って綺麗に見える？」

「ああ、綺麗だよ」

無理にはしゃいでいる姿が痛々しく、俺はそれに精一杯気づかない振りをして一緒に和気藹々としていた。

この儀式が終わってしまったら本当に全てが終わってしまう気がするけど、そんな考えは頭の隅においてやらなければならぬ。少しでも頭によぎってしまったら白けてしまう。悲しくなってしまう。

それに、結婚といえば大人がすること、それをやれば俺達だって大人に近づけることができる。それがなんだが誇らしかった。今思えば滑稽以外のなにものでもないが。

「あなたはよき時もあしき時も、とめる時もやめる時も、えっ」と、とにかく二人とも愛し続けることを誓いますか？」

滅茶苦茶な神父様の口上だったが、詩織の一生懸命さは充分伝わってきたし心が揺り動かされた。

詩織は餅のように丸く白い頬を赤く染めながら瞳を閉じる。それは俺が誓いの言葉を返答することを信じて疑わない、迷いの見られ

ない行動だった。

だけど俺は、詩織が言った『愛し続ける』という言葉だけがどうも気になった。気に入らないというわけじゃないが、どうしても引っかかってしまった。

人を愛すって、一体全体どういう意味なんだろう。

詩織と誓いを交わそうとする前に俺はそんなこと考えたことなんてなかった。

好きだという言葉の意味は理解できるけれど、愛すという言葉と何がどう違うんだろう。同じ意味な筈なのに何かが違う。

そんな簡単に人を愛すなんて口に出していいのだろうか。俺達子どもが軽々しく言っではいけないような、俺達が考えているよりももっとずっと重い言葉なんじゃないだろうか。

俺はこのまま素直に返答してしまっただけなのかどうか分からなくなってしまった。

やる前は自分の行動に意義があると自信があった。だけどこんな土壇場になって俺という人間はぐだぐだと考えてしまっていた。

俺はもしかしたらあの時、生まれて初めてあんなに悩んだのかも知れない。

ふと、気が付くと詩織は閉じていた瞼を開けていた。

そして詩織の大きな瞳には不安の色が宿っていた。その瞳からはもう少して透明な滴が零れそうだった。

「んっ、んん」

それでも彼女は必死にそれを抑えていた。唇を強く噛み締めながら目を眇めていた。

俺の前では絶対に泣かないという断固たる決意に満ちたその顔を見て俺は決心した。

これからのことを子どもなりに覚悟した。

たとえどれだけ離れていても、どれだけの日月を経た先にどんな困難があつたとしても、それを乗り越えていく覚悟。

それがあるかどうか。

俺は口を歪め、その時の自分自身の答えを出した。

「誓います」

彼女は泣き出しそうだったことをすっかり忘れたように天使のような笑みを浮かべる。

その時俺は勝手に誓ったんだ。

俺は絶対に彼女を泣かすようなことは絶対しないということ。

それは今でも俺の心にしっかりと刻まれている。

あいつの泣き顔を見るぐらいだったら俺は――。

+

離原詩織視点(3)

季節は初秋。

夏は分厚かった雲は、誰かが無理矢理千切ったかのようにガリガリになっている。そして茂っていた青葉はゆっくりと時間をかけて紅葉になっていく。朝から汗が出ていたあの時が懐かしく、今は少し肌寒さを感じる、そんな季節。

学校へと続く緩やかな坂道には、同じ制服を着た生徒達で溢れている。

「うつ！」

その内の男子生徒の鞆の金属片に太陽光が偶然反射する。私は目を眇めながら片手で影を作る。

その手よりもさらに内側に、何者かの両手が突如私の顔に当てられる。つまりは、いきなり後ろから掴まれ目隠しをされた状態。

「だーれえーだ？」

こんなことを早朝から仕掛けてくる人間は、私の知り合いの中で一人しか該当しない。良く言えば自由奔放で天真爛漫。悪く言ったら利己的で子どもっぽい。

だけど、

「麻美、おはよ」

「ハロー、詩織。今日も格別に可愛いわね」

瀬川麻美は、私の親友でありクラスメイトだ。

高校生離れたプロポーションと快活な性格で男子生徒はおろか先生にまで人気が高い。そのせいで女子生徒からはやかみの的だが、麻美自身は全く気にならないらしい。そのへんは麻美らしい。

「うーん、ほんつ——とに可愛いっ！　いますぐ食べちゃいたいくらいっ！」

「ちよつと、止めてよ麻美。みんな見てるってば」

麻美は人目を憚らず、私を後ろからぎゅっと抱きしめた。まばらに登校していた生徒は、奇異なものを見る目でちらちら盗み見ていた。

私は麻美と違って目立つのはあまり好きじゃない。やるにしても教室でやってくれないと、ここじゃ周りの視線が集まりすぎてしまう。

「いいじゃない、なにか減るもんじゃないんだし。それよりも詩織の身体ってえ、干したばかりの布団みたいにやわらかーい。一家に一枚は欲しいわ」

猫なで声で寄りかかってくる麻美を私は強引に振り払う。こうでもしないと麻美はどいてくれない。

「もうっ！ 私は布団なんかじゃないからっ！」

「ごめんねえ、詩織。でも珍しく朝から詩織の後ろ姿が見られたと思ったら詩織へのラブがどうしても抑えられなくってえ」

確かに麻美と登校時間が重なるケースは稀有だ。ほとんどの場合、朝の弱い私が遅めに教室に入ると麻美の方が先に来ている。

そして、麻美は周りにいるたくさんの男たちを掻き分けて私に抱き着いてくる。麻美特有の外国人ばりの挨拶は、はじめどう対処していいのかあたふたしてた。だけどいまでは麻美のハグ攻撃に慣れてしまった。そんな自分が恐い。

「いいから、もうっ行くよ」

私は憤ったふりをして麻美を促して急かす。スキンシップをしてくるのは私のことを憎からず思っていてくれるということだろうけれど、やっぱりこのまま毎朝抱き合っていると良くない噂が飛び交うだけだ。

ここは私が心を鬼にしないと、マイペースな麻美と永遠にこの押し問答が続いてしまう気がする。いや、この場合は押し問答とよりは麻美が聞く耳を持たないので、「暖簾に腕押し」という語句が適切かも知れない。

「ああっ！ 待ってよ詩織。怒らないでよ。ねっ、ごめんってば」

私は早歩きで麻美の静止を振り切る。ここで甘い顔を見せてしまえばまた彼女は調子に乗ってさらにエスカレートした甘え方をしてしまうだろう。

麻美の猫のように自分の人生を楽しんでいる姿はとても好意的に見える。そんな生き方ができるのなら自分だってそんな人生を送ってみたいと思える。

それだけ彼女のことが羨ましい。

だけど、どんなことにでもいえることだろうが、限度というものがある。

麻美は私に必死で平謝りしながら駆け足で追いかけてくる。それ以上の速さで私は振り切ろうとしたが、学校の靴箱に着いてしまったので足を止めざるを得ない。

「ね、この通りだから」

両手をすり合わせながら頭を下げられてしまい、その光景にまたもや周りの視線が集まってしまう。

麻美の長髪で顔色が確認できない。ただの予想だが私から顔が見えていないから絶対に笑っていると思う。

私が怒ると、どうしてだがみんな馬鹿にしたように笑ってしまう。どうやら全然恐くないらしい。

虚仮にされるのは心外だけど、他人を怒ることができない性格の私に迫力が皆無なのはしかたない。そう、諦めているけど、こういう時には威圧感が欲しい。

私とは逆に、黒葛くんの顔が険しくなっただけでクラスには妙な緊張感のはしる。あの雰囲気になっただけで胃がきゅっと絞まる。彼の逆鱗に触れないようすることがクラスメイトの暗黙の了解になっている。黒葛くんぐらいドスの利いた声で言えば、麻美だって少しは反省するだろうけれど、持っていないものをいつまでもぐちぐち嘆いていもしかたがない。

それにしても麻美は、私が許すその時までこの低姿勢を保つらしい。妙に背筋を伸ばしたままで腰を折っている。

他の人間がこの姿勢でいると井戸から這い出てくる幽霊に見えてしまうだろうが、彼女は違っていた。

さらさらの長髪はなだらかな曲線を描いていて、まるで川のように瑞々しく潤っている。

麻美のように胸に届きそうなくらい長髪だと手入れも大変になってくるのにどうやってここまでツヤのある髪のを維持できているのかが不思議だ。

私は肩にかかる程度の髪の長さでも毎朝、髪の設定で悪戦苦闘しているのに。

「……いいよ。最初からそんなに怒ってないよ。だからもう顔あげてよ」

麻美はさっきまでの態度とは裏腹にばつと、元気よく顔を上げる。その顔には満面の笑顔があり、その太陽のような眩しさに目を背けたくなる。

「あ、り、が、とお、詩織！ さっすが、私の嫁ね！」

控えめに言って肩に抱き着くという行為だが、実際はもっと艶めかしかった。麻美のしなやかで色っぽい肢体が私の身体に絡みつくようにくっつく。

すると否応なしに、普段考えないようにしていることを意識してしまう。

麻美の私に対する布団のように柔らかいという形容詞に他意はない。ないと思うのだが、まるで遠回しに私の身体はぽっちゃりしてしまっていると思われたみたいであまり気分のいいものじゃない。麻美は好き好んで他人に対して誹謗中傷することはない。だけど彼女の常に羽を伸ばしているような言動に振り回されて傷つくことは多い。

けれど彼女にも悪気がないのだから注意するのも違う気がする。それでも、こつこつ毎日のように抱きつかれているとこつちの身も持たない。

「もう、反省してるのっ？」

「反省してるわよ。だから怒らない、怒らない」

彼女の反省しているは、反省していないの同義語だということは身に染みている。ここまで自己を徹底して貫かれるとこちらの方が折れてしまう。

私が苦笑しているとそのことに気付いた麻美はふふつと微笑を浮かべている。

「それじゃあ、教室まで競争ね」

「えっ？　ちよつと、待つて麻美！」

不意を突かれた私は麻美に置いてかれてしまう。私は鞆を抱えながら必死で追いかける。最後はいつも麻美がこうやって強引に主導権を握ってしまう。

いくら女子からの嫉妬があるとはいえ、裏表のない麻美の性格は男女関係なく大多数の人間から好かれている。

なのに、どうして私なんかの相手をしてくれるのかいつも不思議だと考えていた。その疑問は時間が経つごとに肥大していき、ある時とうとう私は訊かずにはいらなかった。

私がその疑問を明言した時に麻美は一瞬呆けたが、その直後にふつと微笑を浮かべた。

「ばつかだねえ、詩織は。そうやって自分を戒めることができる人間ってさ、世の中にはそんなにいるもんじゃないのよ。みんながみんな自分は正しいと思い込んでいるもんなのよ。……それは私にも言えることなだけだね。なに？　その顔？　やっぱり気付いてなかったんだ、自分の価値ってやつに。あつ、価値って言っても詩織を物扱いしているわけじゃないわよ。そーだねえー、言い方を変えれば長所ってやつかな。だから私は詩織と一緒にいて全然苦痛じゃない。っていうか一緒にいて楽しい。うーん、だーかーら、とにかく、私は詩織の——親友なんだよ」

最後に私が見た麻美の表情はいつになく能面で、だからこそ彼女の言葉は私の心に響いた。葉に付いた露が重みに耐えられなくなつて落ち、湖水に波紋が広がるようにゆっくりと、そして確実に私に

心の一番奥底に染み渡った。

そして私は麻美に抱きついた。そんな私を麻美はいつものようにじゃれ合う為ではなく、透明な雫が頬を伝うことのないように私を抱きしめ返してくれた。

麻美の方が私よりも背が高く、私の頭に彼女の顎が当たる。場違いにもそれが気になったけれど、彼女の腕が私に回ると何も言えなくなってしまった。

自分でも単純で馬鹿だなんて思うけれど、泣き出してしまいたい衝動に駆られる。

私は昔から何もしていないのに人の反感を買ってしまう気質があるらしく、他人からの純粋な好意を受けることがなかった。

だから、いつも友達になった人間に私がどういう風に思われているのか確認してしまう。そんなことをしてしまえば、嫌われると分かっていてもどうしても不安になってしまう。そして、いつも友達だった人達は私から離れていくんだ。

……だから、麻美から言われた言葉は私が日頃から一番言われたかった言葉だ。

自分の存在を認められるってことは、普段は気付かないことだけと本当は尊いことで、人生の内に何度あるか分からないものなんだ。こんな欠陥だらけの私でも、麻美は親友だと言ってくれた。それが嬉しくないわけがない。

「よし、お先に！」

麻美がドアに手をかけ、教室に入りそうになっている。私は周りの男子生徒達が啞然としているのを無視しながら全速力で彼女の後を追いかける。

……たとえ彼女のことを追い越すことはできなくても、せめて彼女の横に立てるように努力したい。

なぜなら親友はいつだって傍にいて、何かあったら相談に乗って、そして絶対に裏切らないってことだって私は思うから。

離原詩織視点（4）

教室にはほとんどのクラスメイトが登校していた。

やっぱり朝ご飯を食べるのに時間がかかり過ぎたのと、麻美と喋りながら登校したせいで遅刻ぎりぎりの時間になってしまったのだろうか。

私は教室に掛けられていた時計に目をやる。

だけど、予想外にも時計が指し示す時刻は、私がいつも登校する時間よりはむしろ早いほうだったので私は首を傾げる。

どうしてこんなに人数がそろっているんだろう。

私の様子に気づいた麻美は、教室の中でも人口密度が異常に高い一角に指を指した。

「きつと、あれをやるためなんじゃないの？」
なるほど。

男子生徒達は死にもの狂いで、昨日出題された英語の宿題をやっていた。あんなに慌てる位なら事前にやっておけばいいのに、いつも私は疑問に思う。

私の高校の英語教諭は自分から率先して授業をやるうなんて殊勝な人じゃない。あの先生の英語の授業は毎回宿題の答え合わせで全てが終わるつまらないものだ。つまりは授業時間ずっと宿題の答え合わせができるように、大量の宿題が出されることになる。そうして、毎日宿題に手を付けない男子は、毎回のよう悲痛な声を上げている。

最初の頃はまだ真面目にやっていたのだが、この時期になってくると学校の雰囲気にも慣れてしまったのか、最近はめっきり宿題をやらなくなってきた。

その男性陣の中で悠々と、余裕の表情をしているのは黒葛くんぐらいなもので見ていて悲惨だ。英語の担任教諭はそれら全てを見越

して黒葛くんと女子生徒には黒板の前に立たせない。

その陰険さが更なる反感を買うことを助長していることに、あの教師は気が付いているのだろうか。大人になると子どもの頃に何を考えていたのかもすっかり忘れてしまいうらしい。

先生だって今の私達と同じように教師に腹を立てていた筈なのにミイラ取りがミイラだ。それとも、自分が受けた仕打ちと同じ仕打ちを生徒にすることによって自分のストレスを解消しようとしているのだろうか。

どちらにしろ救いがたい思考の持ち主だ。

「黒葛！ 頼む。今回だけ！ 今回だけでいいからっ、お前のテキストを写させてくれ！ でないとまたあの先生に虐められちまうよ」
今にも土下座しそうな勢いで黒葛くんに助けを乞っている男子生徒は、橋下一樹くん。黒葛くんとは正反対の軽薄な性格なのに、なぜか二人が一緒にいるところをよく見る。

でこぼこな二人だからこそ、足りない部分を補っている関係なのかも知れない。それをいうなら私と麻美も全く違う価値観を持っているのに噛み合っている。

だったら私達もへこんでいる部分を埋め合う関係なのだろうか。

そうは思えないけれど。

私はでこぼこだらけの獣道で麻美はコンクリートのように完璧に舗装されている気がする。

でも、だからこそ私達は一緒にいれるのかも知れない。……それなら噛み合う筈がないか。

確かに完璧に見える麻美だけど、女子に嫌われているという事実がある以上何かしらの欠陥を抱えているのかも知れない。

それは、彼女の性格だろうか。でも、彼女の自然体ともいえる姿勢は私の憧れるところで、良いところでもある。それとも、別の何かがあるのだろうか。

宿題のリミットに迫られている他の男子生徒も蜘蛛の糸に縋るような眼で黒葛くんを見る。

「お前のそのセリフ、毎日のように聞いている気がするが、俺の気のせいってことでいいのか？」

「頼むよ、な！ 俺らの仲じゃないか！ ちょっと写すぐらいいいだろ？ お前が損することなんてなにもないんだからさ」

黒葛くんはしがみつきそうに被さってきた橋下くんを苦々しい表情でひらりと躲しながら、痛烈な言葉と汚いものを見るような視線で冷たく突き放す。

「ちょっと、ぐらいならな。お前らいつも俺のテキスト全部写すだろうが。写すなら写すで少しは頭を使ったらどうだ。解答を少し変えるぐらいの工夫ぐらいしろ、馬鹿かお前は！ それに損ならあるぞ。お前に何かしてやるたびに俺の寿命が一か月程縮まる」

「寿命が縮まるって、俺と相手するのにどれだけのストレスを抱えているのか図り知れねえだろ。そんなに俺ってウザい？ まあ、俺と関わっちゃって黒葛も大変だろうけれど、その言葉を投げかけられた俺のことも考えてください！ そんなこと言われたら俺はこれから先どうやって生きていけばいいのか分からねえだろ！」

黒葛くんの言っていることは正論で、橋下くん達のやっていることはあまり感心できない行為だ。けれどあれほど手痛く痛めつけられた橋下くんを見てしまうと彼に同情してしまう。

教室の時計にちらりと目を移すとそろそろホーミングのチャイムが鳴る時間が迫ってきている。

ホーミングが終わった後に十分間の猶予はあるが、その短時間ではあの宿題量とこの男子生徒の人数から逆算して到底間に合うとは思えない。

だからこそ黒葛くんをなんとか説得しようと橋下くんはあんなにも必死なんだ。

「ああ、俺たちは馬鹿だよ、大馬鹿だよ！ 黒葛とは違ってなっ！ だけどなあ、そんな俺らにだって譲れない一線が、プライドってもんがあるんだよ！ あの養教師が宿題をしない俺らを毎度毎度馬鹿にした笑いには俺らだって腹に据えかてんだ！ だから、例えば俺

らの成績が悪かったって、宿題ぐらいはやるってことをあいつに見せつけてやりてえんだよ！」

完全に逆切れだろうけれど、その言葉には得体の知れない力がこもっていた。

ただこうして頼み込んでいる時間があればまだ自分自身で宿題を進めた方が効率的だ。それでも頼み込むのは自分で宿題をするよりは黒葛くんの宿題を写す方が楽だからだろうか、それとも今更後には退けないからだろうか。

橋下くんの言葉には頑強な芯が見え隠れしていた。鉛筆のように力を入れてしまえば簡単に折れてしまうようなものだが。

「だったら、自分の力でやれ！ だからお前ら馬鹿にされんだろーがっ！」

本気で激昂する黒葛くんに、橋下くんが怯む。

周囲の人間はもつと引いている。黒葛くんのあまりの剣幕に教室が静まる。宿題を写そうと雁首をそろえていた男子生徒も、おしゃべりをしていた女子生徒も黙った。

それだけ黒葛くんの三白眼には迫力があって、教室の時間は止まったかのように誰も動かない。そんな誰もがこの事態をどう收拾しようか迷い、何もしようとしない他人任せの状況。雰囲気。

そこで、麻美だけは動いていた。

「もう、黒葛くん。ちょっとぐらいテキスト貸してあげてもいいじゃない。橋下くん達が困っているのは本当みたいなんだし」

「……瀬川。こいつらを甘やかすと後々ロクなことにならないぞ」

一見、橋下くんに助け舟を出したように思えるこの麻美の言動はきつと、黒葛くんを助けるためだ。もしもあのまま麻美が何もしていなかったら黒葛くんの周囲の評価は最悪になっていただろう。

こんな最悪の事態をたったの一言でひっくり返すことができるのはきつと彼女だけだ。私は何もすることができなかった。いや、ほかの人たちと同様でしょうともしなかった。私には何もできないから、やろうとしてもきつと悪い方向にしか進まないから何もしな

い方がマシだっと思ってた。

でもそれは黒葛くんと真正面から接する勇気がないだけのただのいい訳にしかないんだ。

でも、一つだけ自分に言い訳させてもらえるなら、あれだけ黒葛くんに拒絶されたら、他人から鈍いと揶揄されている私だって心が傷つく。これ以上私に頑張れというのは酷じゃないのだろうか。

黒葛くんの席に近づいていった麻美に、橋下くんが狼のように迫る。

「ありがとう、瀬川。ああ、そうだよな。俺達も本気で困ってたんだよ。それなのに黒葛くんは我が儘ばかり言いやがってよお……相変わらずケチだなあ。よし、瀬川、もっとこの分からず屋に言っちゃってくれ」

「ほらな。中途半端な優しさを振りまくと、調子に乗った変態にセクハラされることになっただろ。悪いことは言わないからそいつに関わるのだけは止めとけ。俺みたいに後悔することになるぞ」

麻美の両手を強く握りしめている橋下くんを黒葛くんは睥睨しながら揶揄する。麻美は橋下くんの手をゆっくり外すと、黒葛くんにさらに接近する。

「いいわよこのくらい。有名税の一種だと思うことにするわ。それに私、こういったことには慣れてるつもりよ」

橋下くんのこととはまるで眼中に入っていないかのように麻美は黒葛くんにウインクする。黒葛くんも橋下くんが何か言おうとして口を開きかけたが完全に無視していた。

「有名？」

「ほら、私って結構美人で有名でしょ？」

抜け抜けと言い放つ麻美に、黒葛くんは一瞬きよとした後苦笑する。そうなったことによって、教室の空気も緩和する。

凄いな、麻美は。

私は文字通り何も出来ずに立ちすくす。

周りから批難されるかも知れないギリギリな台詞だと思うのに、

あれだけの大胆発言を言えるのはきつと麻美の長所で、他の人間には決して真似できないことだ。

でも、その凄さが理解できない人間、いや心の底では分かっているからこそ、やっぱりかみを入れてくる人間は少ない。どうして素直に彼女の凄さを認めることができないんだろって思う。

やっぱり光あるところに影ができるように、麻美を貶しようとしても足にしがみ付いていないと気が済まない人間がいてしまうということとは宿命なのだろうか。

私は意図的に麻美の足を引っ張ってやろうだなんて考えたことはない。

ただ麻美という人間を尊敬している。

それだけのはずだ。

私が羨望の眼差しを送っていると、麻美は黒葛くんに耳元で何かを囁いた。その時、私と黒葛くんは一瞬眼が合った気がするが、どちらかとは言わずに目を逸らした。

麻美に何を言われたのかは分からないけれど、黒葛くんは分かっただよ、と私がぎりぎり聞き取れた小さな声で呟くと、橋下くんに向き直る。

分かったと言った時に舌打ちのような音が聞こえたような気がした。

「ほら、もう時間ないからさっさと写せよ」

机の中から英語のテキストを取り出して渡すと、橋下くん達は歓喜の声を上げた。ありがとう、瀬川。困ったときの瀬川さん。やっぱり好きだ、瀬川麻美。黒葛を制御できるのは瀬川だけ。

「おい！ 俺に感謝しろ！ 俺に！」

怒号を撒き散らす黒葛くんだが、その表情は柔らかい。その程度は黒葛くんの許容範囲だと踏んだのか、橋下くん達は英語のテキストを取り戻そうとする黒葛くんをからかいながら、背を向け逃げ出す。

私は麻美が黒葛くんにどんな説得方法を試したのか気になった。

クラスメイトである男子達の塊を避けながらなんとか麻美に辿り着く。

「麻美、さっき黒葛くんになんて言ったの？」

「うーん、大したことじゃないわよ。私はただ黒葛くんの弱点をついただけ」

「弱点？」

「いくら詩織だからだって教えてあげられないわよ。こういうのはね、自分で見つけるからこそ楽しいんだから」

黒葛くんに弱点なんてあっただろうか。私が見ている限りどんなことも卒なくこなしているように見える。

敢えて短所を挙げるとしたら少し怒りっぽいところだ。そんなこと本人に指摘してしまったらさらに怒ってしまうだろうけれど。

「なーに？ どうしたのよ？」

無意識に笑っていた私に、麻美は自席に着きながら私に質問を投げかけてくる。

言ってしまいたいのは山々だがここで言ってしまうと黒葛くんの耳にも入ってしまいそうだから遠慮しておきたい。仮説だろうがなんだろうが、今黒葛くんを刺激してしまったら、それこそ火に油を注ぐ結果になりかねない。

「教えてあげない。こういうのは自分で見つけるからこそ面白いんだよ」

私はおどけた調子で麻美に言われたことをそのまま返す。

「……もう。そうね、だったら交換条件でどう？ 私は黒葛くんの弱点は何かっていうことを詩織に教えてあげるわ。代わりに詩織はさっきなんで笑っていたかの理由を私に教えて。勿論、先に言わなきゃいけないのは詩織よ。なんたってこっちは秘中の秘。黒葛くんの、ううん、私のトップシークレットなんだから」

「えっ……」

麻美の破格の提案には内心かなり揺らいだ。私の笑った理由なんて些末なことだ。それと引き換えに黒葛くんの弱点を知れるなら言

うことはない。せめてこの場所を変えれば麻美に話せる。絶対に黒葛くんに言わないという条件なら私も気兼ねなく言うことができる。「おい、瀬川。余計なこと吹き込むなよ」

黒葛くんが小声ながらも、ドスの利いた声で麻美を牽制する。他の人間ならば少なからず引いてしまっただろうが、麻美は全く意に介さなかった。代わりに満面の笑顔を返す。

心臓に毛が生えているとはこういうことを言うのだろう。少なくとも私には麻美ほどの度胸は持ち合わせていない。

「ごめんね、黒葛くん。詩織がどうしても訊きたいって言うから仕方なく……」

「ちよおつと——」

私が口を出す前に、麻美は手でそれを止める。つんのめった文句は私の胸の中で暴れるが、もう一度吐き出そうとする前に麻美に先を越される。

「詩織もごめんね、さっき言っていたあれは全部嘘だから。黒葛くんの弱点なんて知らないし、私が知っていたとしても詩織には教えません。ね、これでいいでしょ？ 黒葛くん」

最後は黒葛くんに向き直って平謝りする。

黒葛くんは溜め息をつきながら麻美の席の隣に、つまりは自分の席に着く。

いいな、私なんて机五個分黒葛君と離れている。

でも、黒葛くんと近くの席になっても仲良くなれる気がしないし、グループ学習の時に気まずい思いをするだけだからかえってよかったのかもしれない。

麻美は黒葛くんとそれは楽しそうにお喋りモードに入ってしまった。居場所のなくなった私は自分の席に座る。

ホームルームが始めるまで暇だなと思い、私は教科書を開き予習をし始める。いつてもやっているふりだけで、英語の文章は全く頭に入ってきていない。

麻美がいないと私は途端にやることがなくなってしまっ。私も黒

葛と同じようにクラスメイトとは必要な会話しか交わさない。

だって、たくさんの人間と浅い関係を築くよりは、特定の人間と深い関係を結ぶ方がいいと思うから。

高校を卒業してから関係が続く、そんな人間関係こそが本物だと思う。

だから私はこれでいいんだ…… って思い込もうとしたけど失敗した。

そんなのは人間関係をうまく築けない人間の負け惜しみだ。

だけど今の私に何ができるかなんてわからない。ほんとうに何がしたいのかわからない。

わかりたくもない。

離原詩織視点（5）

午前の授業終わりを告げるチャイムが鳴り、生徒達の緊張の糸は一斉に切れる。

先生が教室のドアを閉めたと同時に、開っきばなしのノートに突っ伏した。慣れない朝起きの代償がここにきて表面化したようだ。長時間そのままの態勢でいると額が赤くなって恥ずかしい思いをするのは目に見えているが、今は一瞬でもいいから安息の時間が欲しいという願望の方が遙かに上回っている。

全校生徒は大体三組のグループに分かれる。

大食堂でリッチに日替わり定食を注文して、和洋の料理に舌鼓を打つグループ。

売店でお目当てのパンを奪取する為にクラウチングスタートで教師の制止を振り切り、廊下を猛烈な勢いで走るグループ。

そして、教室で優雅に悠々たる面持ちでお弁当を箸でつつくグループに分かれる。

机に何かを置かれた音で重い頭を上げる。できればそのまま眠ってしまいたいが、無視するわけにもいかない。それに休んだお蔭で少しは楽になった気がする。

「これ、落としてたわよ。早く机の上のやつ全部片づけて、一緒にお弁当食べましょ」

「ああ、ありがとう。ごめん、ちょっと待っててね」

麻美が拾ってくれたシャーペンを筆箱に入れ、机の上にあったものを机の中に全てしまうと、テキストとノートが分厚すぎて机の容量いっぱいになってしまう。どこに苦情を言えいいのか分からないが、この机の小さは勉強が本業の高校生にとっては致命的だ。……といっても私はそこまで真面目に勉強をするほうじゃないが。

親にはそろそろ塾にでも通いなさいと口を酸っぱくして言われて

いるが、テスト前に必死で徹夜するタイプの私が塾に行っても根気が長続きするとは思えない。

私は机の横にかけてあった鞆を取出し、机の中を整理して午後の授業に備える。

私と麻美はいつも学習机を向い合せてお弁当を広げる。つまりは三つ目のグループだ。彼女は前の席の女子に机を動かしていいか了承を得て、私の机とくつつける。

いつもは学校での時間の中で昼休みというこの瞬間だけを心待ちにしているといってもいいぐらいなのだが、今日の私の心は曇り空だ。鞆の中に入っていたこの二つの弁当箱はどうしよう。

学校に遅れてしまいかもしれないと急いでいたので、ラップをして冷蔵庫か冷凍庫に入れておくという簡単な考えにすら至らなかった。

一つは私がおいしく食べるとして、もう一個のお弁当はどうしよう。今の季節を考えると放課後までに腐る心配はほとんどないとは思うのだが、それでも心配だ。せめて保冷剤ぐらいは持って来ればよかった。

「あれ、どうしたのそれ？　もしかしてお弁当作りすぎちゃったの？」

「うーん。ちょっとね」

麻美は固まっている私を見かねたのかいつの間にか鞆を覗き込んでいた。そして二つの弁当箱を勝手にむんずと取り出す。

作りすぎた言い訳を考えつきそうになかったので、麻美には隠し通そうとしていたのだが、こうも簡単に見つかってしまったとは思わなかった。

いつも食堂か、売店で昼食を摂る黒葛くんの為に弁当を作ったのだけれど、どうしても受け取ってもらえなかった、なんていえる訳がない。

黒葛くんと一緒に暮らしていることは誰にも秘密で、麻美にすら言えないのは心苦しい。それは相談してしまいたいことではあるが、

黒葛くんの態度から考えてもタブーだ。

もつとも、麻美に打ち明けたとしても普段の私達の交流のなさを見ている彼女は信じてはくれないだろうけれど。

「それじゃあさ、私にその弁当箱一個くれない？ 詩織一人じゃ流石に食べきれないでしょ？」

「えっ、いいけど」

私は麻美の申し出をありがたく受けることにした。

私一人じゃ弁当二箱を平らげることなんて不可能だっただろうから正直助かった。それに食べられたとしても弁当箱二個も平らげてしまったら余計に私のぜい肉が増量してしまう。

だけど麻美ってそんなに食欲旺盛な人間だったかな。

私よりは食べていた気がするけど、それでもいつも持って来ている弁当箱の大きさは私と同じくらいでそこまで大差はなかった。

麻美はありがと、と私に礼を言くと、私の弁当箱を机に置き、麻美自身が持ってきた弁当箱をどこかに持っていく。今日はほかの場所食べるのか、それとも何か用事を思い出したのだろうか。

「はい、黒葛くん」

「どうしたんだ、それ？」

麻美は黒葛くんに弁当箱を突き出す。

私は何をしていいのかわからずに立っていただけだった。

「これはね、私が黒葛くんの為だけに作ったお弁当よ。良かったらさ、食べてくれない？」

え？

どうして？

「悪いが弁当なんていらない。俺は今から橋下と学食行く予定だしな」

「本当なの、橋下くん？」

麻美は落ち込みながら橋下くんを見やる。橋下くんは座っていた椅子を思いつき引いて、勢いよく立ち上がる。

「おい、瀬川さんの手作り弁当を断るなんてどういう神経してるん

だよ黒葛わ。瀬川さん、そんな奴に渡すぐらいならそのお弁当俺にください。うちの母親の手抜き弁当にはもう飽き飽きだ。どうして俺は毎日毎日お昼に昨日の夕食と同じオカズを食べないといけないんだ！ 新手の拷問か？」

「んー、そうだなあ。橋下くんが私の為に土下座しながら頼み込んでくれたなら、このお弁当を橋下くんにあげることを考えてあげないでもないんだけどなあ」

本当に土下座しようとしてしゃがみ込む橋下くんを、水溜りを飛び越えるように麻美は飛び越える。

そして嫌がつているように見える黒葛くんに弁当を無理やり持たせる。

「もっつ、そんな顔しないでよ。まるで私が悪者みたいじゃない？ そこまでして黒葛くんを困らせるつもりはないわよ。そんなに嫌なら食べてくれなくて結構よ」

いつの間にか麻美と黒葛くんにクラスの視線が集まってくる。二人ともクラスでは目立つほうだから仕方ないのかもしれない。黒葛くんはその視線に気がついたのか動揺していた。

「だから俺は——」

「だけどせつかくなんだからお弁当の中身見るだけ見てよ。これは私から黒葛くんに贈る初めての愛妻弁当なんだから」

「……ああ、わかった。これはありがたくだいておく」

ある意味黒葛くん以上に頑固な麻美の性格を考慮したのか、彼は意外にあっさりと折れた。それとも自分の意見を聞かない麻美に、抵抗するのが徒労だと分かったのだろうか。

それにしても麻美は料理が苦手で家事など一切手伝わないと常日頃胸を張っていたような気がするけれど、今日だけは弁当を作ったのだろうか。

「おいおい、俺が口をはさめなかったことをいいことに勝手に進めてんじゃねえ。黒葛、なんでお前がちゃっかりもらってんだよ。少しでもいいから俺にも分けてくれえ！」

黒葛くんは、土下座状態から早くも復帰した橋下くんを宥めながらも、鼻水の出ている橋下くんを苛立ち気に避ける。

「汚いからその鼻水を引込めろ。食堂行くぞ。お前確か今日は弁当ないんだろ？」

えっ、と橋下くんは今自分の鼻腔から鼻水がはみ出ていることに驚く。ずずつとうどんを啜る音に似た音をさせながら鼻水を引つ込める。

「あるわけないだろ。お袋があんたに弁当作るぐらいなら、自分の睡眠時間を確保するほうがよっぽどいいって言われたんだよ！とつとつ弁当作ることすら放棄したんだけど、うちの母親！このままじゃ餓死するんだけど！なあ黒葛、毎日俺の弁当を作ってくれないか？」

「その言葉だけを何も知らない人間が聞いたらいらぬ誤解を与えそうだから一生お前は俺に近づくなよ」

片方が言い寄っていて、もう片方が冷めているカップルのように歩く二人を見送っていると、麻美が私にウインクをしてくれる。

「ほら、私達も食べましょ」

「……うん。あorsa、質問したいことがあるんだけど」

やばい、自分の思っていたよりも暗い声に焦る。私にはできるだけさり気なく麻美に訊いておかなきゃいけないことがあるんだ。

「いいわよ、私は詩織が訊きたいことはなんなりと答えるわよ。あつ、さっきのトップシークレット以外なら何でもって意味だけどね」

声のトーンをあげる。

「麻美つてさ、ご飯作ったりするの？」

「うーん、今日のお弁当はお母さんがおいしく作ってくれたわよ！」「……いいの？ 嘘ついちゃって」

私は黒葛くんにお弁当を渡すことができなかった。それなのに麻美は普通に渡せている。そんな彼女に私はきつと嫉妬しているせいで刺々しい言い方になる。

「いいのよ。嘘も方便っていうでしょ？ ああでも言わないと黒葛

くんだって受け取らなかったし、詩織のお弁当もどうしていいのかわからなかったんだし、あれで良かったのよ。それに、最近料理はするわ。お菓子作りにはまっているんだけど、今度は弁当に挑戦しようかしら」

ああいう風に私にも強引に黒葛くんに渡せるだけの勇気があればどれだけ楽なんだろう。だけど私の性格がそれを許さない。ひと前ではできるだけいい子であるように演じている私には。

別にクラスの人気者なんかになりたいわけでもないが、私は誰からも嫌われたくない。それはいじめの対象になりたくないだけの汚い自己防衛。

さすがに高校生になってまで誰かをいじめようだなんて幼稚な行いは、少なくとも私が見える範囲の中では認知していない。だけど私が小学生の時にはいじめに似たようなことをされた。

その時は黒葛くんが助けてくれた。いつだって黒葛くんは私の為に身体を張ってくれた。

黒葛くんと交流がなくなってからは人の意見に首を振ったことがなかった。そうやって相手の意見に反した行動をしなければ面倒な争いに巻き込まれることもない。彼が私を守ってくれなくなり、麻美と出会うまでは私は一人きりだった。そのときに自分なりに学んだ処世術が自分の個性を消すということ。

その期間が長すぎて、自分のアイデンティティというものがどんなものであったのか、さっぱり憶えていない。

だから、麻美のように自由奔放に振る舞える人間を見ると眩しく感じる時がある。

彼女のように少しでも自分の意見を言えるようになれば黒葛くんとも話せるようになるのだろうか。

「あつ、さっきのお弁当作ったの私じゃないってことは黒葛くんには内緒よ！　だって、黒葛くんに私が平気で嘘をつくような人間だって勘違いされたくないから」

……麻美は少し、自分の心に正直過ぎると思うけれど。

黒葛陸視点（3）

十

詩織には俺がついてやらないと駄目だった。

他人よりも行動するのが鈍く、それでいて能天気な性格が災いしてクラスメイトからはいじめ同然のことをされていた。

あえて本人に聞こえるような声量で詩織の悪口をみんなで囁いたり、授業中に先生が黒板に文字を書き始めた時を狙って、消しゴムの残りカスを後頭部めがけて投げたりと、陰湿ないじめが続いていた。

その程度どうってことないと思うだろうが、小さなことが積み重なって行けば神経が磨り減るような大事に発展していくのは世の真理だ。

詩織はこんなはいじめじゃないって強がってはいたが、俺が見る限りでは、眼に見えてやつれていつているように見えた。

そんな詩織を見るのが嫌で、いじめのようなことが起こる度に俺は詩織を庇い、二人きりになった時は慰めてきた。皮肉にもそれがさらに二人の仲を急接近させる要因になったのだから、人生ってやつは分らないものだ。

そして、いつの間にかいじめっ子たちの標的は詩織から俺にすり替わっていた。

そのいじめ方は明らかに詩織の時よりエスカレートしていた。おそらく、俺が男だからという理由で、多少厳しく当たっても平気だと踏んだのだろう。そんなところで過大評価されてもらっても全く嬉しくなかったが……。

みんなは直接俺にかかつては来ず、いじめ独特の陰険な手で俺の

精神をどんどん削っていた。

椅子の上に画鋲を置いたり、上履きを分かりにくい校庭の影に隠したり、教科書にいたずら書きをされたり、ノートを何枚も破かれていたり、犯人が特定できないようなやり方は俺を徐々に辟易していた。

もしも俺に直接的に攻撃してくるなら立ち向かうか、大人に告げ口をするかどうかしていたらう。

あり得ないことだが、もしも俺にその勇気がなかったのなら無視することもできた。

だけど、やられてみて初めて解ったが、いじめっていうやつは、自分をいじめている相手が分からない状態というのが一番キツかった。

相手がどんな想いで俺を苦しめているのか分からない。

いつになったらこのいじめの連鎖から抜け出せるのか予想ができない。

――まるで、生き地獄。

いじめられる度に俺の身体の中では、なにか、どす黒いモノが溜まっていき、毎日吐き気がした。このままじゃ俺は精神が破綻してしまうのではないかという、大げさでない危惧すら感じるようになってきた。

辛かった。

誰かに相談したかった。

だけど……。

いったいこの感情の捌け口をどこに向けてやればいいのか分からなかった。

黒葛陸視点(3)(後書き)

次は早めに更新します。

黒葛陸視点（4）

「何してるの？ りつくん」

放課後俺は教室に残り、自分の机にサインペンで罵詈雑言の綴られた黒いインクをなんとか落そうと四苦八苦していた。

授業中、先生が見回る度に、俺は毎回腕を使って隠していた。そしてその度に、どこからかくすくと笑い声が漏れていた。

なあ、どうしてお前らは、そんなに嬉々として他人を傷つけることができるんだ。

なんで、俺がどうしても後ろめたい気持ちにならないといけないんだ。

俺の心中の何も理解出来ずに、こうやって無邪気に質問してくる詩織が憎たらしかった。

お前のせいで、お前を庇ったせいで俺がこんな辛い思いをしているんだ。

お前、わかってんのかよ。

全部お前のせいなんだよ。

お前が泣けば、挫ければよいけいな火の粉は俺に降り掛かることもなかったんだ。

なのに、よくそんな残酷な言葉を堂々と吐けるよな。お前のそういう無神経なところが苛められる原因になるんだよ。そうやって他人のことを思いやれないお前なんて、結局はいじめている連中と根本は一緒なんだ。

いいか、今に見てろよ。あいつら、俺をいじめるのに飽きたら、今度はお前をいじめることに本腰を入れるぞ。きつと、この前いじめのやり方は飽きたから、もっと残酷ないじめになっているだろうな。今のうちにそうやって精々笑っている！！

……最低だな、俺。

ただの八つ当たりじゃないか、こんなの。
もう、俺には関わるな。

「……なんでもねえよ。あつ、」

咄嗟に腕で隠した文字を無理矢理こじ開けられ、詩織に見られてしまった。

いちいち詩織に愚痴をこぼすのも憚られるし、こいつにだけは自分のみつともない姿を見られたくなかった。だけど、こうなってしまったら、もう開き直って笑うしかない。

「どうだ？ 笑えるだろ？」

これは全部お前のせいなんだ。

お前なんてやつを庇って俺はすげえ後悔しているよ。

……っていつても、鈍感なお前はこの惨状を見てもどうしたの、これ？ って他人事のように訊いてくるんだろうな。

詩織に顔を向けると、俺はぎょっとした。

詩織は大粒の涙を流していた。泣きそうになったことは何度なく見てきたが、彼女が涙を流すのを見るのは初めてのことで、かなり狼狽してしまった。

情けないもので、生まれた時から女の涙に弱く、この時の俺は右往左往するしかなかった。

他の奴だったらこういう事態に陥った時にどう対処するんだ。

くそつ、こういう時に咄嗟の機転を利かすことができないから俺ってやつは……。

どうにか、ない頭を絞って打開策を捻り出さないと、俺はあの時の誓いを破ることになる。

「……ごめん。ごめんね、りっくん」

何のことについて謝っているのか分からず、俺はどう答えていいのか、どうやったら詩織の涙を晴らせるかどうかを考えていた。そうすることしかできなかった。

今まで俺は詩織とコミュニケーションをとる上で悩んだことはな

かった。なぜなら物心ついた時から俺達はいっだって傍にいたからだ。まるで二人は兄妹のように、いや本当の兄妹よりも仲が良くて、まさに以心伝心していた。

だから、だからこそ何をすればいいのか。

「……私の、せいだよ」

詩織はなんとか涙をこれ以上流さないようにと、堪えながら自分の本心を紡いでいく。

「私がとろくてみんなを怒らせちゃったから、こうしてりっくんにまで飛び火しちゃったんだよ。私、馬鹿だけど、それぐらいは分かるよ。最低だよ」 私

「そんなことはねえよ」

言葉は、思考せずとも勝手に飛び出した。

「うっん、最低だよ。本当はちよっぴりそうなのかなって思ってたんだ。だけどそれを認めたくなかった。もしも黒葛くんのいじめを止めようとしたら、また私がいじめられちゃう。それが怖かったの。自分の弱い心に負けちゃったんだ」

詩織の目尻に透明なものが溜まっていく。

「ねえ、もう、私はりっくんに近づかないから。一生りっくんとは関わらない。だから、もう大丈夫だよ。もう――」

詩織はわっと泣きながら顔を伏せる。それ以上は涙のせいで言葉が続かないみたいだ。嗚咽が徐々に強くなっていく。背を丸めながら必死に感情が溢れ出てこないようにと堪えている。

はあー、うぜいな。

あーあ、無性に面倒臭くなってきた。

俺ってこういうタイプの女子って本当に苦手なんだよな。泣けば何でも許してもらって思っているタイプ。そういう茶番劇は俺がいないどっか遠くでやって欲しいもんだ。

なんかこういう感じ嫌なんだよ。俺が悪くないのに、何でもいいから謝らないといけないみたいな雰囲気。こういう重いやつはどう対処していいのやら。

……ほんと。

……ほんと、馬鹿だよな……お前は。

自分がいじめられている時には全くへこたれていないようにみんなの前では気丈に振舞っていた。俺の前でさえも弱みを見せないようにって、完全には泣き顔をみせなかつたくせに、なんだそのザマは。

泣きすぎてかなり面白い顔になってるぞ、お前。

「別にいいよ、そんなこと」

……おいおい、なんだよ。どうしたんだよ、俺。

まったく、これじゃあ俺だって詩織のこと馬鹿にできないな。

どうしてだろうな。なぜか俺の意思とは関係なしに勝手に涙があふれてるんだ。

はっ、ふざけるなよ、俺はこいつの前で泣きたくねえんだよ。弱みを見せたくないんだよ。

女の前で泣くとか最高にかっこ悪くて……みつともなくて……穴があつたら入りたいくらいだ。

俺ってこんなに涙脆い人間だったか？　こんなに感情が簡単に揺り動く人間だったのか？

おそらく、こんなに俺が弱い人間になるのはおそらくこいつと一緒に居るときだけなんだ。

だけど、この弱点はきつと短所じゃない。

詩織の傍にるときだけ弱くなるってことを裏返せば、自分の弱みをこいつにだけは見せられるってことだから。

それは俺にとって、こいつは、——雛原詩織が——特別な存在ってことなんだ。

「泣いているの？」

あんな、泣いている男に向かってそんなこと訊いたらこっちの立場がなくなるって知ってるか？　本当にどうしようもない奴だな、お前は。やっぱりお前には俺が傍にいて色々教えてやらないと駄目みたいだな。

「泣いてない」

自分の弱さを曝け出せる存在があるってことは、きつととても幸せなことで、絶対に手放してはいけないものなんだ。

だけど、やっぱり今は強がりたい。強がらなきゃいけない。それは女からしたら、くだらなくて安っぽいプライドだって笑われるのかもしれない。

けれど、俺はお前の前では精一杯笑っていたんだ。

「りっくん、泣かないでよ。りっくんが泣いていると私までえー

ー」

詩織は思い出したかのように再度思い出したかのように泣き出す。ほんと、こいつは俺の気持ちを理解してくれないな。見て見ぬふりっていう言葉を知らないのか、こいつは。

でも、だからこそ??。

俺は詩織にアイアンクロー気味に目隠しをする。

うぐつと女らしくらぬ声を上げるが俺は気にしない。

これで俺の恥ずかしい泣き顔は詩織には見えないし、これなら普段は言えないような馬鹿な言葉も言える。

今日だけは特別サービスだ。明日からは今まで通りだから調子に乗るなよ。

「俺はいま泣いていない。だから、お前の傍にいても全然辛くないってことだ。……だから、お前は俺の傍にいてもいいんだ」

こうでもしないと自分の心に素直になれないんだ。

ちよつと前までは詩織のことは人目を憚らずに好意を抱いていることを、口頭で、おくびにも出さずに触れ回ることが可能だった。

けれど最近、それができなくなっていた。

どうしてそうなるのか、このときまで俺は解らなかった。

やっと解った。

それはきつと——俺がお前の顔を直視出来ないほどに好きになっ
てしまったからなんだ。

†

黒葛陸視点（4）（後書き）

だいたい三分の一ぐらい消化しました。まだ読みたいという希有な人は、もうしばらくおつき合ってください。

離原詩織視点（6）

この大型デパートの地下には様々な人気のチェーン店が展開されている。その為、大勢の人間が押し寄せてきたとしても、充分に座るスペースが確保されているのが魅力だ。

買う層としては、食品売り場の品揃えも豊富なので、子ども連れの主婦から一人暮らしの学生にまで幅広い支持を受けている。その為、夕方の時間になると学生のたまり場になっている上に、値引きされた食品を買い漁る主婦までもが参戦するので、かなり混雑してしまう。

だけど、こうやってたまには寄り道がてらくつるぐのも悪くはない。

私は麻美と二人で季節外れのアイス舐めていた。
突発的な行動を起こすのは麻美らしい。

「今からアイスでも食べない？」

麻美の思いついたような一言で、私たちはこうやって椅子に座って足を休めている。

帰り道から少し外れたところにあるので、少し歩かなければいけないのが難点だが、それでも寄り道するにはもってこいの場所だといつていいだろう。

最初はこの時期にアイスを食べるのもどうかなのかと躊躇していた。

だけど、外が肌寒い時に、こうやって暖房が効いている室内で食べるアイスは、私も嫌いじゃないことが判明した。

どんなことも、やってから始めて解る事であるんだな。

二人ともコーン付きで麻美がバナナで、私はチョコミント味を選び、お互いのアイスを食べあいっこしながら何時ものようにだらだ

らと世間話をしていた。

すると、どうもいつもの麻美とは様子がおかしいことに気がついた。普段から他人の挙動を伺いながら生きているので、少しでもどこがおかしいと分かってしまう。

気になった私は、麻美にどうしたのかと問いかける。すると、彼女から私が思ってもいなかった言葉を投げかけられた。

「あのね、実は私、詩織に相談したいことがあるの。訊いてくれる？」

「それは、勿論いいよ……」

私が麻美に悩みを相談することはあっても、麻美が私に弱みを見せるのは、これが初めてなような気がする。麻美はいつだって自信満々に行動していて、悩みとは縁がない人間だと思っていた。

ただどよくよく考えるとそんなことを彼女に思うこと自体が失礼なことだ。

きっと誰にだって悩みの一つや二つくらいある。

「でも、それって私なんかでいいの？」

「いいわよ。ううん、むしろ詩織にしか喋れないことだもん」

麻美は私と違って社交的であり、女友達がたくさんいる。その中で私が選ばれて誇らしいという気持ちと、私ごときが相談相手になるのかというプレッシャーが胸中で混ざり合う。

一瞬の逡巡の後、私は覚悟した。

麻美が是非にと言うならば、私もできるだけ彼女の期待に応えようと思う。

私はアイスを舐めるのを一旦中断して、麻美の言葉に真剣に耳を傾けることに専念する。

麻美は言ってしまったていいのかを躊躇うように、視線をデパートにあるラーメン屋さんの暖簾に移しながら逡巡すると、その重々しい口をようやく開く。

「私ね、好きな人ができちゃったの」

「……へ？ 麻美が？」

どんな重大なことを相談されるかと思い固唾を呑んでいたのだが、思ってもいない方向から飛んできた言葉に、思わず素で答えてしまっていた。

私のその反応に気分が害したのか、麻美がむくれてしまう。

「なによお？ そんなに私に好きな人ができたことがおかしいの？」
「ううん、そうじゃないの。そうじゃないんだけど、やっぱり驚いちちゃって」

麻美が他人に好意を寄せるなんて、今まで考えたこともなかった。どれだけクラスの男子が言い寄ってきてても、麻美は一度も顔を縦に振らなかったのに。その頑固さから、麻美は色恋沙汰の類には興味がないものだと思い込んでいた。

「それってどんな人なの？」

麻美のハートを射抜いた男の人に興味がないと言ったら嘘になる。どれだけ性格や外見がいいのか見当もつかない。

高校生なのだろうか、いや、心身ともに大人びた麻美は年上が好きなのかも知れない。大学生か、それとも社会人なのだろうか。そもそも日本人なのかどうかも定かじゃない。

彼女が外国人の彼氏と連れ添っている姿を想像してもなんの違和感もない。すらりとした身長で、ほりの深くて優しげな顔、さらさらの金髪を風になびかせながら、彼女とにこやかに話すイメージが突然湧く。

麻美は持っているアイスを見下ろしながら顔を伏せてカミングアウトを続ける。

「私も自分自身気づかなかったことなんだけど、やっぱりこれって一目惚れってやつなんだって思うの。始めて会ったときは恋愛感情なんて我ながら似合わないって思っていたし、なによこいつって悪い印象しかなかったの。だけど、気がついたらその人のことばかり眼で追っている自分がいたんだ。これっておかしいことなのかな？」

麻美の問いかけに私は横に首を振る。

彼女はそんな私を見やるとありがと、とぼつりと呟いた。

「その人はね、私がちよつとでも落ち込んでいたらすぐに気付いてくれるの。そしてその度に私のことを気遣って私の為に色々してくれるんだ。……優しい。うん、きっとあの優しさに私はやられちゃったんだと思うんだ」

麻美は紅潮しながら夢見がちに話す。

麻美の、まるで恋人を語るような惚気話を聴かされて、こんなに甘いチョコミントアイスを選んだのを後悔した。せめて彼女と同じバナラを選ぶか、最悪コーヒーでも注文しておけばよかった。

彼女の話の全て鵜呑みにすれば、どう考えても麻美の意中の彼女は彼女を意識している。間違っても悪い風には思っていない。

これじゃあ、ほとんど両想いみたいなものだ。

私は麻美が本気で誰かを好きになったら、きっといい恋ができると思っていて。そうあって欲しいと心の底から願っていた。

けれど、実際にこうやって話を聴かされるやっぱ嫉妬してしまう。私にも、こうやって他人に思い人の自慢ができるような恋がしたい。

「それでね、できれば詩織に協力して欲しいの。お願い、何でもするから。……本気なの」

親友の麻美にこうも拜むようにお願いされては断る是非もない。

私がすべきことは全力で協力するに決まっている。

「うん、分かった。いいよ、こんな私でよければ」

「ほんと？　ありがとう！」

麻美に猛烈な勢いでハグをされる。

私は苦笑しながら、手に持っているアイスが落ちてしまわないように必死だ。

「それで誰なの？　麻美が好きな人って？」

「黒葛くん」

——えっ、黒葛くん？

視界がいきなり霞み、口の中がからからになる。心臓が嫌ってというほど暴れる。

そう、そうだよね。

麻美と黒葛くんってクラスでも結構仲好さそうにしてる。

他人を寄せ付けようとしない黒葛くんが、異性であればと接近を許しているのはおそらく麻美だけだし、あっちも脈がないわけじゃないかなって思っていた。

だけど私は、麻美が黒葛くんのことを異性として見ているとは全然考えていなかった。クラスで黒葛くんじゃれ合うような接し方をしているのは、麻美お得意のいつもの冗談の延長線上での行為だと思っていた。

だけど、今から彼女が本気で黒葛くんにアタックするなら二人は急接近するだろう。ああ見えても押しに弱い黒葛くんのことだから、麻美のように強引なタイプの人間には弱いのもかもしれない。

——そして黒葛くんと麻美が付き合う？

そのビジョンを明確に意識すると景色が揺れてしまった。一瞬呼吸の仕方を忘れてしまう。眼前の視界に映る全てのものが滲んでいく。

「麻美、私さ、ごめつ——」

引き離そうとするが、麻美は腕に力を込めてそれは叶わなかった。「詩織、私達って親友よね？」

嫌だよ、何言ってるの？ 麻美。私は、私が好きなのは、昔からずっと見てきていたのはあの人だけなんだよ。

親友だったら分かってくれるでしょ？ なんでそんなに残酷なことができるの？ 私には二人の仲を応援するなんてできっこないよ。ふと、きがつく。

……ああそうか。私は麻美を、親友だ親友だと言いながら彼女に大事なことを何も話していないじゃないか。

私が想っていることを何一つとして伝えていない。

それなのに私は、麻美が私の全てを理解してくれていると思った。言葉に変換しないでも、私の心を全て把握してくれているって、心のどこかで麻美に頼りにきりになっていたんだ。

そんなこと絶対にあり得ないのに、私は勝手に麻美を悪役にしてしまっている。言葉にしないと理解してもらえないことだって、たくさんあることは既にもう痛いほど解っているのに……。

なんで私っていつだって遅いんだろう。

どうして大切なものを失ってしまうまで気が付かないんだろう。

「詩織、さっき協力してくれるって言ったよね？ だからお願い、もう詩織だけが頼りなの。これは詩織にしか頼めないことなの」

抱き着かれたままでよかった。

もしも、今の私の顔を見たら、優しい麻美はきっと心配してしまうだろうから。私の密かな想いに、気付いてしまうだろうから。彼女に向かって自然な笑顔などできなかっただろうから。

だから、よかったんだ。

「いいよ、麻美は私の親友だもん」

何とか全ての力を振り絞って言えた。

今にも溢れそうな涙を、悟らせないように言い切れたのは僥倖だ。ぼたぼたと、手の甲に何かが落ちる。

視線を落とすと、私の涙かと思ったそれは、溶けたアイスだった。

× × × × 視点(1)

1 . 5

私は昔から他人から疎まれていた。

私から嫌われるようなアクションを起こした記憶はない。それでも他人から攻撃されるということは、私に何かしらの原因があるのかと、深く思い悩んだ時期もあった。

だけど、どれだけ考えたところで結論は出なかった。もしかしたらそれは、私がそれだけ考えが及ばない馬鹿なのかもしれない。

けれど、これだけ考えても結論がでないということは、おそらく理由なんてない。……そう考えるようになった。

きつと私の中から出てくるオーラというか雰囲気。

私の存在そのものが気に食わないからだ。

だとしたら悩むだけ無駄で、行動するしかない。

??そして私は、思いつく限りの方法で、今までの自分から脱却することを決意した。

馬鹿な人間を演じた。

人と関わる時には太く一本の線を引いて接するようになった。

わざと軽口を叩くことによって、その場の雰囲気明るくしようとした。

それらのことを実行する事によって、どんなに我が儘を言っても私なら仕方がないという構図を作することに成功した。

そうやって上手い具合に、その場その場を立ち振る舞っていればいるほどに、自分の心のどこかがぽっかりと穴が開いているような感覚に襲われた。どうしてそうなったのか解らなかった。その問題を解決することができずに、怠惰で我が儘な人間を演じていたある日のことだ。私は自分の本心に気が付いたのだ。

——自分の気持ちを本気でぶつけたい、ということ。

自分らしくない自分が日常化したために、私の瞳は濁っていた。友達がたくさんいる。だけど、上辺だけの関係で、四六時中傷のなめ合いをして満足しているような人間ばかりだった。それでいて、本人のいない場所では罵詈雑言の嵐。

私はそれが耐えられなかった。

だから??

「ごめんなさい。私、あなたにこれっぽちの興味もないの」

私は今の気持ちを、素直に伝えた。それが正しいことだと信じて。もしも私が、今のままでいいと自己暗示をかけていたら、あんな最悪の事態に陥ってしまったのかも知れない。

発端は、その当時の親友との仲たがいだった。今となっては、どうしてあんな人と仲良くしていたのかは分からない。とにかく、あの時の私に人を見る目がなかったことは確かだ。

彼女の彼氏がどうやら私のことを好きになっただけ、それはそれは酷い振られ方をしたらしい。

私はその彼氏に全く面識がなく、告白された時もきっぱりと断った。それで、彼女は逆上した。

腹いせというか、完全なる逆恨みなのだが、私をグループの輪の中から弾こうと私の親友は画策した。そして彼女の思惑通り、歪曲した噂が学校中に飛び交った。

あの女は遊び人で二股、三股しても平気な面をしているとか、人の彼氏を寝取るのが趣味だとか、ありもしない出鱈目は、伝言ゲームのように私の周囲に一斉に広まり、私に友達といえるような人間はいなくなってしまった。

昨日まで、実のない話で盛り上がっていた人たちは、嘲笑を浮かべながら私を突き放した。

友人だけじゃない。

学校の誰もが、私を遠巻きにして私の悪口を言っていた。それから私は軽い人間不信に陥った。

他人に本音を話すことがどれだけ愚かな行為なのかを知った。

余計に私の心の穴は広がっていくような気がした。

虚ろな瞳に映るのは、モノクロな世界。

追い風で簡単に吹き飛ぶ、作り物の人間関係。

紙のように薄っぺらい自身。

これが、私なのだろうか？

周りの重圧に敗北し、立ち上がることもしない。

そんな負け犬なのだろうか？

いや？？違う！

？？そして私は完全に開き直った。

噂の重圧のせいで私が辛い思いをするぐらいなら、その噂通りの人物になってやろうじゃないか。

そうしたら思い悩むことはなくなり、新しい人間関係を築くことができるはずだ。

今までいた友達と廊下ですれ違っても、気まづげに視線をそらす関係を修復することは、これから先できないだろう。できたとしても、私のことを平気でカイロのように使い捨てにするような人間と仲良くなれるとは到底思えない。

だったら私は別人のように振る舞って平穏な日常を送ろうと思う。たとえば穴が広がり、この心が空っぽになったとしても、私は他人に縋ったりするような、見つともない人間になりたくない。

親友だなんだといいながら、いざとなったら平気で裏切るようなあいつらと一緒にいるぐらいだったら、最初から何も期待しなければいい。

きつと、私には私に相応しい場所がある。

それから私はまず見た目の印象を変えることから挑戦した。ファッション雑誌や大人の服を観察しながら、どうすればいいか研究し見栄えを整えた。

そして私は、自分から積極的に夜の街に何度も繰り出して、性格そのものを変えてしまおうと考えた。

他人から与える印象も変える為、他人に嘗められないようにする為、どんな人間の前でも私は何度も遊んでいますという態度を崩さなかった。そうすることによって私は新しい自分を形成していった。どうすれば自分を変えられるのか分からなくても、教えてくれる人間を探すのには苦勞しなかった。

夜の街を歩いているだけで男の方から声をかけてきたので、あっちが行きたいところに行つて、あっちが満足するまで適当に一緒にいた。

毎日私は深夜まで遊んだ。

家の人間は私のことを心配するなんて、まともな神経は持ち合わせていなかったなので、深夜三時ぐらいに帰つてもお咎め一つなかった。

家族であつても私は一定の距離を保っていなければ人間関係を築けなくなつていった。

それは私の家族も同じ意見だったらしい。

夜の街を練り歩かなければ、家族の真意もわからなかっただろう。それ以前は私の家族は普通だと思つていたのに、深夜家に帰つてくれば家の中は真つ暗で、私に帰つてきてほしくないかのように玄関の鍵が閉まつていた。

その徹底ぶりには私も思わず苦笑してしまった。

もしかしたら心配してくれている、なんて大層な幻想を抱いていたことが恥ずかしかった。

たとえ土日の昼間に家にいたとしても、両親は家にはいなかった。みんな思い思いのことを自由にやっていて結構なことだ。

そんな時に私は暇つぶしにテレビを見るのだが、たまにドラマの再放送が流れることがある。

そして、友情だとか愛情だとかドラマの俳優が言葉にする度に私は寒気がした。そんなものは画面の向こう側だけの話であり、現実には、少なくとも私には縁のない話した。

私はそういう時はテレビを消して、自分の部屋に引きこもる。分

厚い壁がそのまま私達家族の心の壁のように思えて息苦しかった。認めてしまうと、やっぱり一人で居続けるのはやっぱり寂しい。けれど、一人の時間が長ければ長いほど、ネガティブな思考になっ
ていった。

深い人間関係を築けば、それだけたくさんのしがらみを抱えることになる。

友達なんてものは足の引つ張り合いをするだけで、思いやりなんて言葉とはかけ離れている。そんなことはみんな知っている。

だからみんな他人を蹴落として自分をより高い位置に見せることを日々考えているんだ。それを非難するのはお門違いだ。

その真実に気付かなかった私が悪いんだ。

退屈を埋めるつなぎとして、他人を友達と呼称して利用し合う。

それが、私が生まれ来て分かったことだ。

だから、無知で無邪気な人間を見ているとはらわたが煮えくり返りそうになる。

どうでもいい悩みをさも一大事のように語ってくる人間や、アホ面をぶら下げて全く空気の読めない人間、何も言わずとも相手に自分の意思が伝わると思っている人間。

そんなくだらない人間と友情ごっこに興じようとも思わない。

一生一緒だとか言いながら、学校を卒業したらそんな約束も互いに忘れてしまっている。忘れていなくても、そんなのどうでもいいよねっ、という態でまったく意に反さない。

そんな茶番はもうたくさんだ。

だからこうなってしまっても私は全然後悔していない。

……しちゃんいけないんだ。

× × × 視点(1) (後書き)

過去と現在がごちゃごちゃしていて解りにくいのは、あえてです。

離原詩織視点（7）

2

駅前には大きな噴水が、一定の間隔を置きながら水を元氣よく噴出している。噴水を囲むように石の椅子が円状に設置しており、傍にはのっぽの時計台が建っている。

その時計台の側には、背丈の競争をしているかのように大木が植えられている。どうやったらこんなに綺麗な黄色に染まるのだろうかと感心していると、真つ黄色なイチヨウの葉がそこら中の地面に散らばっていることに気づき、残念な気持ちになる。

他の人達も待ち合わせ場所として使っているのか、高校生ぐらいの男女がまばらに立ったり、石の椅子に座ったりしている。

私は周囲を一周し、誰もいないことを確認すると、石の椅子に腰かけて時計台の時計と腕時計を示し合わせる。大丈夫、私の時計と一緒に。壊れていない。

約束の時間まで十分前。

少し早く着すぎたかも知れない。だけど遅刻してしまうかも知れないということを考えると、どうしても早く行動しないと私の気が済まない。

それに、黒葛くんと同時に家を出るわけにもいけないのでこの時間帯になってしまったのも納得しなければいけないだろう。だけど、「どうしよう」

周りの景色を楽しむ為にプチ散歩をするのもいいが、それで集合時間に遅れてしまったら元も子もない。

本でも持って来ていれば読書の秋というし、読書に勤しむことができただろうが、急いでいたせいで生憎持ってきていない。

そういえば本棚に買ったまま、まだ開封していない本が三冊ぐら

本以外に何か暇つぶしできるものがないか革製のシヨルダーバックを漁るが、入っているのは携帯と財布だけだ。

「あれっ？ 雛原一人だけ？」

クラスでの彼の様子から、遅刻してもおかしくないぐらい、いい加減な人間だと勝手に思い込んでいた。だから、約束の場所に着いたのがほとんど私と同着だったことに、些かながら驚いてしまった。彼に、デートの十分前には待ち合わせ場所に到着する甲斐性を持っているなんて、失礼とは思いつつ果てしなく意外だ。

「うん、他の人はまだみたい」

「時計見てよ、約束の時間までまだ十分前だよ」

私はそびえ立つ時計台を指す。

企画したのは麻美だが、黒葛くんを誘ったのは私自身だから語弊ではない。

橋下くんが目を丸くする。

66

いな。つか、もしかして今回が初めてだったか？」

黒葛くんは、私が最初頼み込んだ時は頑に断っていた。けれど、他に二人来る予定で、黒葛くんが来なかったら三人でも行くことになる。そう、麻美の指示通りに黒葛くんに伝えたと、急にこのダブルデートに行くことに積極的になった。

クラスでの彼は、麻美にだけは少しだけ心を開いているように見える。それは私の勘違いなのだと信じたかったけれど、麻美の名前を出した途端態度が急変したから、やっぱりまんざらでもないのかも知れない。

その事実はこちらも真正面から突きつけられてしまうと、やっぱり落ち込んでしまう。

「……そっか。ありがとな雛原。俺も誘ってくれて」

「えっ？ ううん、私も橋下くんと遊んでみたかったし」

そういうと、なぜか橋下くんが狼狽しているように見えた。私はそんなに変なことを口走ってしまっただろうか。

麻美が男二人じゃないと男女比率のバランスがとれないわよね。

うーん、誰でもいいわよ、それじゃあ、橋下くんあたりでいいわよね、とおざなりに言っていたことは流石に本人には言わないほうがいいかもしれない。

「俺も実はずっと雛原と遊びたかったぜ。でもよ、そんなに俺たちって喋ってもいないじゃん。黒葛と瀬川が喋っているときにニアミスするぐらいだったろ。……だから、俺なんか雛原を誘っていいかどうかどうも分かんなくってさあ」

本気で落ちこんでいる橋下くんに驚き慌てる。

「全然大丈夫だよ。私ってあんまり友達と遊んだりしないから、遊びに誘ってくれたらやっぱり凄いい嬉しいよ」

麻美と遊ぶのもやっぱり楽しいけれど、私には男友達というものを持ったことがない。だから、男の人とどこかに出かけたりすること、憧れに似た感情を持っていたりする。

「そ、そっか！ だったら、今度は俺から遊びに誘ってもいいか？」

「うん、もちろんだよ」

たとえ社交辞令であっても、こうしてちゃんと面と誘ってくれるのは嬉しい。普段から何もいわない。何を考えているのか分からない。そんな人間に気を揉むことに慣れている私にとって、橋下さんの言動は新鮮なもので、ちよっぴりいいなと思ってしまった。

「おっ、二人ともやつと来たぜ」

私は立ち上がって橋下さんの視線を追うと黒葛さんと麻美が談笑しながら歩いていた。

黒葛くんは相変わらず仏頂面だが、それでも麻美と二人で集合場所に来ているということは、二人の間に何か特別なことでも起こったのかと勘ぐってしまう。私とは一緒に来てくれないのに、麻美とは来てしまうのかと、どうしようもないことを考えてしまう。

私たちの関係を知られることはできない。

その、黒葛くんの考えに納得していると思っていたけれど、麻美と二人で来るなんてどうしようもなく予想外のことで、意識せずにいようと思っても結局は意識してしまう。どこかで二人で待ち合わせしてからこの場所に来ているのか考えてしまう。

こうやってぐずぐず考えるより、私が直接本人に聞けるぐらい無神経な人間だったら、そんなことすら考えないぐらい鈍感な人間だったら……どれだけよかったんだろう。

私が生まれ変わることができたなら、きっと橋下くんや麻美のよきな性格の人間になりたい。そうすれば今よりは……。

「おっ待たせえ。待ち合わせ時間ぴったりだったんだと思ったんだけど、もう二人いるってことはもしかして待たせちゃった？」

レースキャミソールの上からは灰色のカーディガンを羽織り、下は膝丈ぐらいのふわふわスカートに、漆黒のニーソを着こなす麻美に私は感嘆する。

私もスカートを着てきたのだが、こうやって麻美を見ると、私にどれだけ似合わないのかが分かってしまい、今からでも着替えたいなってしまうた。

「いいや、全然待つてないですよ。ついさっき来たところです。ただし、もしも何時間も待つていたとしても俺は同じ回答をしていたことでしょう。なんたって瀬川にこうして休日会えただけでも俺は喜びの絶頂。待ち時間なんて一瞬の内に過ぎ去っていったでしょうから」

「それじゃあ、行きましょうか？」

麻美は張り付いたような笑顔で橋下さんの横を通る。もしかして橋下さんの声が聞こえなかったのだろうか。

「ちよつと待つて、麻美」

麻美が先導して進んでいくのを私は慌ててついていく。

黒葛さんと麻美の仲を嫉妬してしまっている、今の私のささくれた気持ちのまま、黒葛さんと隣になっても気まずい思いをするだけだ。だったら麻美と一緒にいたほうがいい。

「黒葛う、どうしよう俺無視されちゃったよ。せつかくオシヤレにきい使つて、この日の為に買ったおニューの服を見ても、全く何も言われなかったよ。俺つて何か悪いことしちゃった？」

橋下さんは身体をくねらせながら、黒葛さんの身体に寄りすぎる。正直、見ていてあまり気持ちのいいものではない。そう思ってしまうほどに、彼の動きはある意味では洗練されたものだった。その証拠に黒葛くんも、彼の動きに翻弄されているようだ。

私は格闘技に関してはかなり疎い。だけど、もしかするとそういう類のものなのかも知れない。

「悪いのはお前の頭だ。今ならきつと手遅れだ、病院に急げ。そして手の打ち所がありませんと医者に宣告されてこい」

黒葛くんはしっしつと蚊を追い払うかのように手を払う。それでもいやいや、と追いつがつて来る橋下くんは納得していないようだ。「あーそうだな。それはおかしいな。多分お前があいつに何も言わなかったからじゃないのか？ だから俺にくつつくな。それ以上くつつくと俺の全身の穴という穴から血が噴き出る」

「まず俺が黒葛に聞きたいことは、俺は人間なのかってことなんで

すがっ！？ それって確実に新種の生き物だろおっ！？」

橋下くんがわざとらしく何かに気がついたような素振りをみせた。
「はっ！ そうか！ なるほどな。黒葛の棒読みには物申したいが、今は瀬川のほうが重要だ。瀬川さん、その服可愛いですね」

橋下くんは片膝をアスファルトにつき、片手を自分の手、もう片方の手を差し出し出す。

一昔前のプロポーズのような、傍から見るとバカっぽい、というか馬鹿丸出しのポーズを恥ずかしげもなくやってのける橋下くんを、私は直視できない。

畏敬の念を抱いているわけではなく、それとは真逆の意味で彼のことを眩しく感じた。

「ありがとう。だけでもうちよつと心が籠ってくれていたらもっと嬉しいわ」

麻美は、橋下くんに一瞬たりとも視線を向けずに歩いていた。

「ひっでえな。俺なりにこれでも真剣にアプローチしたつもりだったのによお。ああこんなにも俺は麻美のことを好きなのに。どのくらい俺がお前のことを想っているかどうか分からせる為に、俺の身体を搔つ捌いて見せてやりたいね。そうしたら、俺の身体の半分は麻美でできているって、証明できるからな」

麻美はクルツと回り、この日初めて橋下くんに視線を向けた。

「橋下くん、今度私のことを名前で呼んだらガン無視するからそのつもりでいてね。二度は言わないわよ。それと、あなたの身体の半分はきつと無でできているから安心して」

容赦ない麻美の言葉に、思わず小さく嘖き出す。

「それって俺には何も無いってことですか？ それって一番キツイ言葉じゃないですかねえ？ 黒葛さんの日頃の口の悪さがまだマシと思えるレベルですよ。頼む！ せめて俺の身体の半分は馬鹿でできているとか、思う存分俺を罵倒してくれ！ そしたら倒錯した快感を得られて一石二鳥だから！」

「分かった。もう全部オーケイよ。あなたの言いたいことは全部把

握したと思うわ。……だから私の半径五十メートルまでは近付いていいわよ。それ以上近付いたら、あまりの気持ち悪さに罰を与えるわ。土下座させた後にヒールで思いっきり踏むわよ」

「ごくつ。そ、それはどのぐらいの強さで踏んでいただけますか？」

橋下くんと麻美は、二人して先に歩いていく。というよりは麻美に橋下くんがストーキングしている構図に見える。とりあえず警察署を横切るときは他人のふりをしたほうが無難なようだ。

どこに向かうも告げられていない私は、必然的に二人の後をついていくことになってしまう。それに、良くわからない二人の高度な会話についていけない。あそこに無理に入って会話が終了し、微妙な空気が流れてしまったら、それこそ何かが終了してしまうような気がする。

「お互い苦労しているな」

横を見やると黒葛くんがいつの間にかいて、そして私は思わず立ち止まってしまった。

だって、黒葛くんが自分から世間話を始めるなんて普段からは考えられない。それぐらい上機嫌だったことだ。

それが嬉しくもあり、悲しくもある。

嬉しいのは、単純に彼が私に話しかけてくれたこと。そして悲しいのは、彼が話しかけてくれたきっかけとなったのが麻美だったということ。

私一人では黒葛くんをここまで引き出せなかっただろう。

それは麻美にとつては当たり前のことなのかもしれない。けれど私にとつては大事件で、今まで悩んでいた私が、どうしもない人間だということを結果として再認識してしまった。

私はスカートをぎゅっと握る。

自分の欠点を何度も見つめなおす。

傷口を抉ってどのぐらい痛いのか確かめてしまう。

これじゃあ……まるで被虐趣味のマゾヒストだ。

だけど私は、自分自身がどんな人間なのか知りたい。何ができる

のか、何ができないのかが隈なく知りたい。

自分を知らなきゃ、どんな行動をとっても失敗してしまうだけだから。

「どうした？ さっさと行くぞ」

「……うん」

だけど今は心の中を嬉しいでいっぱいになろう。

悲しみの色を塗りつぶそう。

そしたら私は前だけを見ることが出来る。

何も考えなくて済む。

それがいいことなのかどうかは、どこかに投げ捨てて――。

難原詩織視点(7)(後書き)

第二章突入しました。予定では、どんどん話が暗くなって行くかと思われます。

何か質問や意見があれば気軽にどうぞ。

離原詩織視点（8）

ここ最近急にできた巨大なアミューズメント施設。

その地下一階にはボウリング場が設けられている。

他の階にはテニスや水泳、バッティングセンターなどスポーツが出来る上に、ゲームセンターやカラオケボックスなどもあり、中高生がよく利用する場所だ。

その中でも一番人気のボウリング場は、食べ物や飲み物の持ち込みは禁止だと注意書きが書かれていた。だけど、たとえ持ってきていたとしても店員さんは暗黙の了解で黙認してくれるらしい。

だからだろうか。

ここに来る前に、橋下くんがコンビニで何か買って食べようかと提案した。

けれど、麻美がそれに真っ向から反対した。

せっかく珍しいメンバーでこうして遊びに来たんだし、どうせなら落ち着いた場所で外食をしたいと麻美が断言すると、他のみんなも賛成した。反対するのも気が引けたし、昼ご飯を食べる前に、軽い運動した方が美味しくなるだろうから私も賛成した。

橋下くんは多少渋ったが、可哀想な事に彼には発言権というものが皆無だった。

彼が返事するよりも前に、麻美はここに足を運びだし、みんなそれに便乗した。

久しぶりのボウリングなので心なしか足が軽い。

たいがい運動音痴な私なのだが、このスポーツ？ スポーツなのかな？ とにかくボウリングだけは自信がある。

まだ真新しい板張りの床は、顔が映るのではないというぐらいに綺麗に磨かれている。

「あっ！」

本当に顔が鏡のように映るのかどうか確かめようとしたただけだ。床を覗き込んでいたら、足を滑らしてしまった。

「うぐっ！」

派手にこける寸前で首根っこを掴まれ、後ろから首を絞められた状態になる。私はその状態からなんとか持ち直すと、後ろを振り返る。

「あ、ありがとう」

「……………」

助けてくれた黒葛くんにお礼を言うが、予想通り無視される。やっぱり、私のはしゃいだのが気に食わなかったのだろうか。

黒葛くんは、ボウリング専用シューズを店員さんから受け取ると、麻美と一緒に椅子に座った。

「黒葛くん、咄嗟によく詩織を助けられたわね」

「目の前で誰かがこけそうになったら、誰だって助けるだろ」

「ふーん、本当にそれなら私も安心なだけだな……………」

一瞬、麻美は眉をひそめる。

「だったらあの時こけそうになったのが私だったとしても助けてくれる？」

「その時になってみないと分からない」

「それじゃあ、私がこける時を楽しみに待っていてね、黒葛くん」

「…………わざとこけたらしたら助けないからな」

私はボウリング玉が何をいいか探すふりをしながら、目では二人を追っていた。

近づいて行って話をしたいが、あの二人の仲を応援すると約束したからには、私はあまり干渉しない方がいいだろう。

他人を盛り上げられる話し上手ならまだしも、口下手な私が行ったところで、援護どころか足手まといになるだけだ。

「雛原、とりあえずシューズ選ぼうぜ。でないとまた転んじゃうだろう。まっ、俺にとっては眼福の可能性があるからむしろその方がいい

いんだけどな」

橋下くんの視線は私の足元に吸い寄せられている。

スカートを履いてきたのを後悔しながら後ろに退く。

「ははっ、嘘だって」

口調は笑っていながらも、その眼は真剣そのもの。

私が動くたびに、彼の眼球も追って動いているように見えるのは気のせいだろうか。

「それよりボウリングで良かったのか？ 俺はカラオケがよかったんだけど、瀬川がどうしてもカラオケだけは嫌だって言ったんだよな。…… ああ、ほんっと、今更なだけさあ。黒葛と雛原を除いて、勝手に俺ら二人で話し合ってボウリングにしちまったけど、ボウリングで大丈夫だったか？」

「うん、むしろボウリングでよかった。小さいころは家族と一緒にボウリングしてたんだ。だから私、ボウリング結構好きなの。でも、どうして麻美カラオケ嫌なのかな？ 歌うのは好きだったと思うんだけど」

たまに帰り道で、麻美は何気なく鼻歌のような小さな音量で歌うのだが、それがとにかく上手くて驚いていた。透き通ったクリアな声と歌手顔負けのホイッスルボイスに、私は内心舌を巻いていた。

まあ、気分じゃなかっただけじゃねえのかな、と橋下くんは私のシューズのサイズを訊いて、自分と私の分のシューズを店員に頼んでくれた。

「そういえば、ここって元々カラオケボックスだけだったやつを改装工事して、ボウリング場やらカラオケやらゲーセンやらに造られたらしいな。元々のカラオケ店を経営していた奴がかなりの馬鹿で、下の人間の教育もろくにしなかったらしいぜ。それでお客から、かん？？なりのクレームが来てたらしいんだけど、それすらも経営者は気づかなかつたらしいぜ。まあ、そんなんじやつぶれて当然だな」
何気ないように言っではいるが、ここまで詳しいのはどう考えても普通じゃない。

「そう……なんだ。ずいぶんここに詳しいんだね」

どうしてそこまで、ここができた経緯を知っているのんだろう。気になったので橋下くんに訊いてみると、何故か彼はしまったという顔をして焦りだす。

「あつ、ああ。……なんか俺って、他の人が興味ないって奴に興味持つんだよ。この意欲を勉強に生かせないのが、俺の駄目さが極まって馬鹿と言われる所以だよ。親にですら馬鹿扱いされてるからな、俺」

自嘲気味に笑う橋下くんと私は、シューズを持ちながら麻美の元へと歩く。

シューズとボウリング玉を両方とも持っていくのは不可能なので、黒葛くんと麻美を見習い、まずは座りながらシューズを履くことにする。

ボウリング玉を選ぶのはそれからでも遅くない。

このボウリング場は時間制ではなく、何ゲーム遊ぶかで決められているので、時間を気にしなくていいのが利点だ。

私はしゃがみ込みながら専用のシューズを履いていると、橋下くんが何時までたっても履く気配がないことに気が付く。

私は少し顔を上げて橋下くんの横顔を見やると、なにやら沈んでいる様子でどこか彼らしくない。何か辛い記憶を思い出してしまったのだろうか。

私は堪らず彼を励ます。

「でも、やっぱり橋下くんは凄いと思うよ」

無表情だった橋下くんの眼が、途端に驚きの色に変わる。

「それって違う方向から考えたら誰も知らないことを知っているってことでしょ。それこそ勉強できる人間ってたくさんいるけど、橋下くんみたいな人間はきつと少ないと思うよ」

特徴のない私よりは橋下くんの方が全然いい。

私はそう思う。

だからそんなに落ち込む必要なんてない。

彼は意外そうな顔を私に向けて恥ずかしそうに眼を逸らす。

「ははは。俺はただの変人ただだよ。くだらないことにはつか眼がいつてさ」

「そんなことないよ。くだらなくなてない！」

声がでかくなつてしまい、黒葛くんと麻美が、話を中断してこっちに視線を向けているのが分かる。

私はそれを無視して、橋下くんを見やる。自分のことを卑下するなんて私だけで十分だ。聞きたくもない。

……そうか。私が普段うじうじ考えていることも他人からしたら、それこそくだらないことなのかもしれない。だったら私は――。

「……ありがとな」

橋下くんははにかみながら私にたった一言のお礼を言つて黒葛くん達の所に行つて、ボウリング玉を選びに行こうぜ、と誘つた。

橋下くんの笑つた顔は真顔じゃなかった。

それはいつもの橋下くんのふざけた笑いと、さほど変わらなかった。

けどどうしてだが、初めて橋下くんが私に素の感情を剥き出しにしてくれた。

なんだかそんな気がした。

黒葛陸視点（5）

十

俺の地域で、一回限りだったがボウリング大会が開催された。

毎晩のように地域の代表者が公民館に集まり、地域活性化のために何をすればいいだろうか……という話し合いで出た答えが、ボウリング大会らしい。

建前は地域一体になることによって地域の結びつきの底上げだが、子どもの視点から考えても、ボウリングはおっさん達の趣味としか考えられなかった。

俺の父親は、仕事でどうしても参加できなかった。そのまま俺も不参加で良かったのだが、それは地域の付き合いというやつだ。

詩織のおじさんがわざわざ車を出してくれ、そこに俺と俺の母親が車内に同席することになった。

だけど、詩織のおばさんはボウリングが嫌いだということで、今日は留守番しているらしい。こういう時に、俺も早く大人になりたいなあ、と切に願う。

……まあ、ようするに俺の父親と詩織のおばさんが欠員という状況だったのだがその時は都合がよかった。なぜなら詩織のおじさんの車は四人乗りだったため、もしも、あと一人でも参加人数が多かったら完全に定員オーバーだった。おそらく、警察に見つかからないように、道中ずっと俺がしゃがみこんでいなければならなかっただろう。

とまあ、俺たちは順調に会場へと向かっていた。

運転席の助手席では、俺の母親と詩織のおじさんが仲睦まじく話しているのを見て安心した。

あの二人が二人きりで話しているところを見たことがないので、あまり仲良くないのかと思っていたがそうではなかったみたいだ。逆に、俺の父親と詩織のおばさんがちょっとしたことでも長話しているのを、今まで見ていたので余計に不安だった。

後ろの座席には、俺と詩織が座っていた。

俺たちはいつも通り、学校やテレビのような当たりさわりのない話題を探しては、くだらぬ話をしていた。いや、あの時は、今と違って話題探しをしていなかった。

あの頃の俺は、頭の中にぱつと浮かんだものを言葉にするだけだった。今は熟考してから話しているが、あの時は思考停止していても、俺たちの関係は成り立っていた。

それはきつと、俺が見るものすべてが新鮮で、何をやっていても楽しかったからだ。だけど、例外ももちろんあった。あの時車に座っていたときの俺は、正直気分が悪くて、話す気力がなかった。

車内ミラーで、自分の顔色を確認すると顔面蒼白で、今にも倒れそうだった。

俺の家からボウリング場まで多少の距離があり、長時間揺られていて、俺はすっかり酔ってしまっていた。

必ずしも俺は酔うわけじゃないが、たまにこうして酔ってしまうので困る。いつも酔うのだったら欠かさず酔い止めの薬を服用することを心がけているだろうに、中途半端に酔ってしまうから忘れてしまう。

だが、それ以外にも理由があった。

「どうしたの？ りつくん。もしかして酔っちゃった？ お父さんに車止めてもらって少し休憩してもらおうか？」

詩織が、俺の身体を横に揺らしながら聞いてくる。悪気がないのは分かっているが、そんなことをしてしまえば、さらに酔ってしまうのが分からないのだろうか、こいつは。

いよいよという時になったら詩織の方に向かって吐くことにしよう。

「いや、大丈夫だ。それよりも……」

俺はどうしようもない理由で気分が悪い。

どうしようか。それを詩織に言ってしまったていいだろうか。もしかしたら、笑われてしまうかもしれない。

「何があつたの、りつくん？」

詩織のその言葉には、俺への気遣いが見え隠れしていた。

何をやっているんだか、俺は。

詩織に心配をかけてしまうぐらいなら隠さないほうがいい。そこまですて隠すほどのことでもない。それに、今の内に詩織にだけは相談したほうがいい気がする。

運転席と助手席を、ちらっと盗み見ると二人とも談笑に夢中になっていた。あの様子ならこっちに気を配る余裕はないはずだ。

俺は意を決して、詩織にカミングアウトする。

「あー、そういうわけじゃないんだけど、いや、というか、これから何かが起こるんだよ。おそらくはとっても悲惨なことが……」

俺は、心配そうに見つめてくる詩織に、一気に言い放つ。

「実は俺今までボウリングやったことないんだ！ 実はそれが不安で、さつきから気分が悪いんだよ！」

始めての試みである、地域の人々を集めてのボウリング大会は、意外にもかなり盛り上がっている。地域の大人から子どもまで集まったので、ちょっとした規模の大会になっていた。

しかも、地域のイベントということで顔見知りが多い。その中で注目が集まるとなると、やっぱり初心者である俺は、浮いてしまいそうで怖い。

公衆の面前で醜態を晒し、知っている人間に目の前で笑われてしまったら、俺は泣ける自信がある。その懸念をよそに、詩織は俺の相談を小さなことだと決定づけるように、なんだあと微笑した。

「大丈夫だよ、りつくん。初めてなら、私が教えてあげる。実は私、こう見えてもボウリングは、得意中の得意なんだから！」

「本当か？ だったら心強いけど、お前って結構運動苦手な方だっ

たよな。徒競走とかでも毎回ビリか、ブーヒーで、みんなから生温かい拍手もらっているよな気が……」

「ほ、本当だよ。私にだって、得意なことの一つや、二つあるんだから！」

ない胸を精一杯そらす詩織に、俺は安堵した。

俺達がいじめられていたのは、この時よりももっと以前のことだ。いじめられていた頃の荒んでいた心理状態を考えると、この時はまるで夢の出来事だったかのように幸せな日常を送っていた。

笑顔の絶えない、悲しいことがあったとしても詩織にいつでも相談できる。そんな作り物のような幸福感に俺は浸っていた。

それはいつか崩壊してしまう幸福だとしても、もうすぐ詩織がどこか遠くへ行ってしまおうと知っていても、あの時は本当に楽しかった。

今だからこそ、そう断言できる。

詩織の熱演をじっと見る。

「ボウリングっていうのはボールをピンに狙いをつけるんじゃないで、レーンに書いてある、三角の印に目掛けて投げるの。そしたらボールはけっこう真っ直ぐ行くから。それで行かないとしたら、ボールの持ち方が悪いんだと思う」

「なるほど」

「あと、ボールを投げるときは、一、二、三、のテンポで投げるの。このリズムが超大切だからね。これを間違えると、リリースポイントまで誤っちゃってボールが変なところにいつちゃうの」

「なるほど」

「あとボールの選び方も慎重にやらないと駄目なの。……って、ちよつと、聞いているの？ りっくん！」

「聞いているよ」

熱心に耳を傾けているつもりだったのだが、俺の相槌がおざなりだったせいで、詩織の癪に障ったようだ。本当に興味はあるのだが、話のポリュームがあればあるほど、どうしても集中力が持続しない。

それから、憤慨した詩織がボウリングの説明を最初からリピートし始めた時には、げっそりした。

しかも、俺の相槌が一言二言だけだった場合は、また何度も最初からリピートされていた。

詩織自身、話を繰り返し過ぎてどこまで話したのかも覚えていなかった。大人が子どもに説教するときに、何度も同じことで怒るのと同じような感じだ。

そのせいで大分疲労は溜まったが、お陰でボウリングの正しいやり方は俺の頭に確実に叩き込まれた。

話の途中で詩織のおじさんが、それってこの前テレビであつた受け売りだろ、とからかって詩織が赤面していたが、俺は詩織の八つ当たりの飛び火が降ってこないように、見て見ぬふりを決め込んだ。だがそれでも詩織は、どうして下を向いているの？　なんで私の話をちゃんと聴かないの？　と怒り出した時は、その理不尽さに泣きそうになった。

女ってやつは、どっちに転んだとしても怒り出すからどうしようもない。

俺の母親もそうだ。

二つの服を俺に見せてきて、今日着る服はどっちがいいかと尋ねてくる時がある。

その時にこっちの服がいいんじゃないか、と提案すると、んー、でも、やっぱりそっちよりは、こっちの服がいいわよね。と絶対に言ってくる。

最初から自分で着ていく服を決めているなら、わざわざ俺に聞かなくてもいいだろうと言いたいのだが、詩織のように逆切れされるのは、火を見るより明らかなので絶対にしない。

自分なりに考えた結果。この前、母親がまた同じ質問をしてきた時に、服も見ずに、んー右の服の方が似合っているよ、とテレビを視聴しながら答えたら、なぜかむくれた。

母親がその時何を言うかと思っていたら、言った言葉はちゃんと

見て選んでよ、だ。

結局どっちにしたって、女ってやつは年がら年中怒っていないと気が済まない人間だと、諦めるしかないみたいだ。

黒葛陸視点（5）（後書き）

すいません、いつもよりちょっと更新遅れました。

黒葛陸視点（6）

ボウリング場。その場所は狭くて、地域の人々が全員入ったら、それこそ貸しきり状態になるぐらいだった。だが、だからこそ人々は、積極的に触れ合えたのだと思う。広がったら身内だけで話すだけだっただろうが、狭いおかげで、俺は、地域の新しい知り合いが増えた。

地域によるボウリング大会は、つつがなく進行していった。大成功を収めたと言ってもいいだろう。子どもは勿論だが、大人も年甲斐もなく張り切っていて、地域の人々が大いに盛り上がっていた。

だが、一つだけ失敗があった。

成功したことによって、調子に乗ったおっさん達が、来年からはちゃんばら大会や、パンくい競争を開催したことだろうか。今の時代にそれをやってもまったく流行らず、子ども達はみんなサボタージユをしていた。

俺は初めてのボウリングを楽しむことができた。その行為自体が楽しかったのと、思いがけないことが起こり、楽しめた。

なんと、今回のボウリング大会の結果は、大人と子ども含めて俺は、二十位という好成績だった。

ビギナーズラックというやつもあったかも知れないが、商品をもたらえるギリギリの順位になれてよかった。

ちなみに、あれだけボウリングの実力を自慢していた詩織は、ぶっちぎりのランク外だった。

俺と同じレーンだったのだが、最初に俺が五本倒してやったつ、と喜んでいたら詩織が鼻で笑い、そのあとにボールを投げた。

構える姿は完璧。

流石だと感嘆していたが、いざボールを投げる時になると、口ポットのようにかくかくしながら動くさまは、正に人間離れしていた。手から離れたボールは、真っ直ぐにピンの真ん中に向かっていき、ピンに当たる五十センチぐらいの地点で、なにかの引力に導かれたかのように、ガーターへと吸い込まれていった。

あまりにも見事に曲がったので、わざとカーブをかけたのではと感服していたのだが、その後もガーターという名のブラックホールへと、詩織はぼんぼん投げ込んでいった。その度にどんどん表情が抜け落ちていく詩織を見て、流石に同情してしまった。

「気にするなよ、たまだまだって。どんな人間にだって調子の悪い時だってあるよ」

「うん」

「大丈夫だって、次ボウリング大会があるなら詩織が確実に優勝するよ」

「うん」

「あなたは馬鹿ですか？」

「うん」

思わず俺は嘆息をする。

これはかなりの重症だ。

帰りの道中の車内。

終始落ち込んでいる詩織を、どうやって元気づけようかと悩む。

これは多分言葉じゃだめだ。何か詩織を喜ばせられるものなんて持っていたかな、俺。

すると、手に持っていた入賞商品に目が行く。

「ほら、一個だけやるよ」

「え？」

俺が貰った商品は、よく分からないキャラクターが描かれていたペアのマグカップだった。

どうせ、俺一人で二個も使うことはない。こんなもので詩織の機嫌が直るなら安いものだ。

「本当に？ やったあ！」

想像以上の喜びように、俺は不意をつかれた形になった。そこま
で嬉しいものだろうか。女の好みはよく分らない。

まじまじと持っているマグカップを、観察してみる。

俺からしてみれば、明らかに気持ち悪い、というより気味が悪い
に近い。とにかく見ていてあまり気分のよくなるようなものではな
いキャラクターなのだが、どうやらこういうやつが好みらしい。

「そんなにいいのか？ これ？」

「ううん、知らないキャラだし、このキャラクターはそこまで可愛
いとは思わない」

あっけらかんと言う詩織に、尚更俺の頭は混乱してしまう。

「だったらどうして、そんなにお前は嬉しそうなんだ？」

「だって、りつくんから初めてもらったプレゼントなんだもん！」

それはあまりの無防備の笑顔で、俺の胸はどうしようもなく締め
付けられた。

こうやって、恥ずかしげもなく自分の心を素直に開く詩織に、俺
は今までどれだけ救われたんだろう。

「ふーん、そんなもんか」

平静を装いながら、密かに、俺は生まれたばかりの小さな幸せを
噛みしめていた。

黒葛陸視点（6）（後書き）

そろそろ、話が暗くなつてくると思います。

離原詩織視点（9）

ファミリーレストランには家族連れも多かったけれど、部活帰りの学生も沢山いた。ユニフォーム姿の生徒や、家族連れ、カップルなどの客で混雑していた。

そんな中、入店のタイミングが良かったのか運よく苦勞せずに禁煙席に座れた。それからみんな思い思いのメニューを注文し、食べ終わった後は何杯飲んでも定額のドリンクバーで長時間粘りながら、談笑に興じていた。

他の店だったら確実に店員に目を付けられるだろうが、ここは大丈夫なようだ。大胆にもイヤホンで何か音楽を聞きながらパソコンのキーボードを叩いている人間や、受験勉強をしているのか複数人で問題を解いている学生服姿の客もちらほら。それに比べれば、私達はまだ可愛いものだ。

「凄かったな、離原」

「大丈夫、詩織？」

「うん……大丈夫だよ！」

橋下くんは皮肉を言われてショックを受けていると、麻美に膝の擦り傷を心配される。悪意はないのだろうけれど、我ながら笑顔がぎこちない。

昔はボウリングが得意だったはずなのに久しぶりにやってみたら、下手とかいうレベルではなかった。

三ゲームやったのだが、一ゲーム目からみんなとのレベルの差に気付いてしまい、あの場から逃げだしたい気持ちでいっぱいになった。

「私、ボウリング得意だから」

みんなに宣言して堂々と投げたら、なぜかボウリング玉はレーン

の半分もいかない箇所で、ガーターに入っていた。

「最初だから大丈夫よ。みんなそこまで上手くないわよ」

麻美に慰められたが、三人とも尋常じゃない腕前だった。

黒葛くんは力強くボールを投げ、多少真ん中のラインからズレても、腕力だけでストライクを取るような投げ方。麻美は精練されたモーシヨンで、静かにストライクを確実に取るやり方だった。二人は対極的な投げ方だったけれど、かなりの腕前だった。

特異な投げ方をしたのは橋下くんだった。

ボウリングの穴に指を入れずに、両手で抱えながら投げるという少々不恰好な投げ方だった。案の定ボールはガーターに一直線で、私は良かった、私にも仲間がいた。……と喜んでいたのもつかの間、ボウリング玉は曲線を描いて、ピンを全て倒した。

ストライクか、調子が悪くても七本、八本と、調子が良くて五本という、みんなと私との圧倒的な実力差。

みんなに追いつこうと、焦った私はボールを投げる動作の時に転び、膝をボウリングの床で擦ってしまい、軽症を負ってしまった。怪我を言い訳にするわけじゃないが、その状態では足に力が入らなくなり、ボウリング玉がはしることはなかった。

橋下くんは、グラスに残ったジュースを飲み干し切るとカラン、と氷がグラスで踊る音がする。

この季節に暖房が利いているとはいえ、氷を四個も五個も景気よく入れるのはどうかと思っただが、麻美と一緒にアイスを食べたのを思い出して、人それぞれ個性があつていいじゃないか、と思い直した。

自分のグラスに視線を戻す。

ホットのいちごオーレは、アイスのいちごオーレより甘く感じて私好みだ。それにホットは心身ともに温めてくれるから好きだ。

だけど肝心の私は猫舌なので、一気に飲めず、ちびちび飲むことしかできないのが難点だ。結局はぬるいいちごオーレを飲むことになってしまっている。

「そういえばこの面子で遊ぶのって意外と初めてだよな。それにしては結構楽しかった気がするのは俺だけ？ あっ、ちよっくらドリンクバー行ってくるわ」

橋下くんは、私と逆にセルフのドリンクバーを多用していて、さつきからドリンクバーとトイレを往復しているような気がする。

ムードメーカーである彼が席を立つと、一瞬みんな無言になってしまふのが気にはなるが、すぐに麻美が話してくれるので助かる。

こんなときに私は何をしゃべっていいのか分からずに右往左往しているし、黒葛くんは普段から寡黙な人間だ。これで麻美がいなかったかと思うと……。

「そうよねえ。黒葛くんもなんだかんだでボウリングを本気でやっていたってことは、楽しかったということでもいいのかしら？」

「……何がしたい」

「べつつにー。ただ、私は黒葛くんのことを知りたかったただけなんだけどなあ」

麻美はコーヒーに砂糖とミルクを入れると、黒いコーヒーに段々と白い波紋が広がっていく。そして白かったコーヒーの表面は、やがてコーヒーの闇色に侵されて縞々模様になっていく。

そして、麻美が小さくて可愛いプラスチックなスプーンで混ぜると、色は混ざり合い、新たな色合いになっていく。

黒葛くんと麻美が何か他愛もない話をしている。

なぜだか私じゃ割り込めない雰囲気。橋下くんもいないから私は暇になって、呆然と彼方を見る。

そして、なぜだか朱に交われれば赤くなるという諺を思い出す。

確かにそれは正しい言葉だとは思うのだが、染まった色は本当に真っ赤なのだろうか。それはきつと、真っ赤ではなく、自分の色と周りの色とか混ざり合った全く新しい色なのではないか。

きつと……コーヒーでも、私でも同じことだ。

こうやって黒葛くんや麻美や橋下くんと話していく内に、私はどんどん変わっていく。

それがいいことなのか悪いことなのか別として、私はここにこうして居て、何が変わったのだろう。変わることができたんだろう。「よっと、何の話？」

橋下くんが炭酸飲料を三種類か四種類ぐらい混ぜ、複雑な色をしたグラスを持って帰ってきた。

……これぐらい変わってしまうと、自分の個性が塗り潰されていて頭がおかしくなりそうだ。

他人の前で別人な自分を演じすぎて、自分が何色だったのかを忘れてしまった。そしてその色が、いつの間にか本当の自分になってしまったような、そんな色をしていた。

「橋下くんをどうやってハブろうかなってみんなで相談してたの」麻美の嘘に、飲もうとしていたいちごオーレを嘔き出してしまいそうになる。目の前にいたのが黒葛くんだったので、どうにかこうにか抑え込む。

「おいおい、瀬川。そんな強攻策に出ちまっていいのか？ そっちがその気ならこっちも本気で相手をしてやるぜ。そっちがハブるなら、こっちからハブてやる！ ふん、これが抑止力ってやつだな！ そうだろう、みんな！？」

橋下くんはさも自分が頭のよい発言をしたように自慢げに話す。そういう言い方をするから、橋下くんはあまり賢いとは思えないのだが。

「黒葛くんって魚が好きなの？」

「はあ、なんで？」

コーヒーをちびりちびりと飲む麻美は橋下くんから視線を外して焦点を黒葛くんに合わせる。

「ファミレスで刺身定食を注文する人なんて初めて見たから、そんなに好きなのかなって思ってた」

「そんなの普通だよ。まあ洋食よりは、和食の方が好きだけどな」確かに朝食が和食だった時の方が黒葛くんは多少テンションが高いと。それと、一番好きな料理は卵かけご飯だったはずだ。もはや

料理ではなく卵をご飯の上に乗せただけのものだが、それが一番らしい。橋下くんも変だが、黒葛くんも変わっているといえは変わっている。

「あれ？ ちょっと……もしかして今この瞬間から俺のハブリタイムの開始？ あれれ？ 嘘だろう、おい！ ……あれ？ 反応がない。……すいません、俺ごときが調子に乗ってました！ 全面的に俺が悪かったです。反省しています。だから許してください」

橋下くんの声のボリュームが大きくなっていき、迷惑そうにこつちを睨んでくる客もでてきた。

「俺を無視しないであげて！ てゆーか最近俺こればかりじゃない？ これでも結構俺傷ついちゃってるよ？ 意外に俺繊細な方だから！」

橋下くんが涙ながらの訴えを黒葛くんがなんとか宥める。

「橋下、いいからお前は黙れ」

「良かった。俺って無視されてない。……ってなるか！ それはそれで傷つくからっ！ この中には俺のことを無償で心配してくれるような親友。いや、心の友と書いてシンユウと読むような人間はいなのか？ ぽんようはいないのかよっ？」

黒葛くんと麻美は、下を向いて誰か橋下くんの相手をしてくれる人間を待っているようだが、私にだってどうしていいのが皆目見当がつかない。

でも、流石に目線を逸らすのは可哀そうかと思い、顔だけは上げていた。

実際には五秒程度だったと思うが、体感時間は五時間ぐらい沈黙が続いた。それを破ったのは橋下くんだった。彼はまるで何事もなかったかのように真顔になって麻美に話しかけた。

「そういえば、俺麻美のメルアドって知らなかったよな。またこの面子で集まってどっか行きたいし、この機会に赤外線しない？」

「そうね。黒葛くんと連絡をとるのに、いちいち学校で話さないといけないのは面倒だもんね。それに、今回みたいにみんなで遊ぶと

きに誰かが何かの用事が急に入って遊べなくなった時とかに、みんなの連絡先を知らないっていうのは不便なもの。そうしましょう！」
二人が携帯を取り出したので、私も慌ててバッグを手探る。それを見やった黒葛くんは、渋々といった感じでみんなと連絡を交換し合った。

みんなで遊ぶというのは、ただの社交辞令かと思ったし、これで断ったら嫌な空気が流れるだろうから、私も交換した。

連絡を交換するのは、嫌というわけではないが、私はあまりメールというものが得意ではない。以前麻美にそのことを告げるとメールに得意も不得意もないと笑われたのが、麻美には私の気持ちが分からないだけだ。

絵文字を多用するメールを見ると、眼がチカチカするし、そこまです工夫してくれたメールにそっけなく絵文字なしに返信するのもどうなのだろうか、といつも悩んでしまう。そうやって悩んでいると、メールを送るのに時間がかかってしまい、結局迷惑をかけてしまう。そういえば……。

赤外線通信をしながらはた、と気が付く。

同居しているのにも関わらず、私は黒葛くんのメルアドを知らなかった。

……知ったからといって黒葛くんにメールを送れるのかどうかは全く別の話だけど。

それから私たちは、メルアドを交換し終わった後、それぞれ別れた。

黒葛くんは、どこか遠回りしたのか私より遅れて家に帰り着いた。帰ったら黒葛くんは私に今日の出来事について話しかけてくれるかと思っただけで、いつも通り私たちは全く話さないまま、私はベツトに横になった。

携帯を開くと、麻美と橋下くんから、今日は楽しかったね、また行こうなどといった当たり障りのない内容のメールが送られてきていたので、私もほとんどお内容のメールを返信して眠った。

——そして私は、思っていたよりもずっと早い、生まれて初めて二人きりのデートをすることになった。

離原詩織視点(9)(後書き)

何か意見があれば、なんでもおっしゃってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4147z/>

アイス

2012年1月12日20時00分発行